
技を極めし者なり

ベルム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

技を極めし者なり

【Nコード】

N8807W

【作者名】

ベルム

【あらすじ】

21XX年。人類はオンラインゲーム時代を迎えた。これはその中で起きた事故により、別世界に飛ばされてしまった一人の少年（青年）のお話である。この作品は、作者の思いつき、その場の乗り、ご都合主義、矛盾、主人公無敵過ぎてワロタの5つからなっています。

始まり（前書き）

どうも

最近テストと補修と風邪で忙しいベルムです。

こんなん書いてんだったら速くあっち更新しろ
と思った方。

最近私は

書くことと書いていざ書き始めるとアイディアが消える
と言う不思議現象に頭を悩ませています。

授業中は湯水に如く沸いてくるのに・・・orz

始まり

VRMMO

今やこの名前を知らないものはほとんどいない。

世界は21XX年。

人類は新たな困難を乗り越え、また新たな技術を確立させた。

バーチャルリアリティシステム

(これはとばしてもいいお)

バーチャルリアリティは、コンピュータなどによって作り出された^{サイバースペース}世界をコンピュータグラフィックスなどを利用してユーザに提示するものと、現実の世界を何らかの方法で取得し、これをオフラインで記録するか、オンラインでユーザに提示するものに大別される。

後者は、とくにユーザが遠隔地にいる場合、空間共有が必要となり、テレプレゼンス、テレプレゼンス (en: Telepresence)、テレマージョン (en: Teleimmersion) と呼ばれる。また、ユーザが直接知覚できる現実世界の対象物に対して、コンピュータがさらに情報を付加・提示するような場合には、拡張現実や複合現実 (en: Mixed reality) と呼ばれる。現実と区別できないほど進化した状態を表す概念として、シミュレートドリアリティ (Simulated reality) があるが、これはSFや文学などの中

で用いられる用語である。

バーチャルリアリティは、3次元の空間性、実時間の相互作用性、自己投射性の三要素を伴う。インタフェースは通常、視覚および聴覚を利用するが、触覚、力覚、前庭感覚など、多様なインタフェース（マルチモーダル・インタフェース）を利用する。

1968年にユタ大学の アイバン・サザランド によって HMD（ヘッドマウントディスプレイ、頭部搭載型ディスプレイ）が提案されたものが最初のバーチャルリアリティであるとされる。視覚のバーチャルリアリティとしては、1991年にイリノイ大学の Thomas DeFanti らによって提案された CAVE（Cave Automatic Virtual Environment、没入型の投影ディスプレイ）が有名である。（出典：Wikipedia）

その技術が数年前から大型オンラインゲームに導入された。

ネットゲーマーは今までにない感覚に衝撃を受け涙した。

だがその衝撃はネットゲーマーではない人、つまり一般ピーポーにも衝撃を与えた。

そして、世界は

今までに類を見ない

オンラインゲーム時代を迎えた・・・

これは、そのゲームのひとつである『過去の遺産 英雄に受け継がれるもの』をプレイしていた一人の少年の物語である。

始まり（後書き）

批判は誤字以外受け付けません。

その他はイヤデス。

ゲーム紹介（前書き）

どもっ

今日もグダグダ更新行きます。

ゲーム紹介

この

『過去の遺産 英雄に受け継がれるもの』

には三つの要素がある。

まず一つ目。

・さまざまな種類の種族と職業・

このゲームではキャラクターメイキングのとき

人間、亜人、獣人、エルフ、ハイエルフ、ダークエルフ、精霊、吸血鬼、悪魔、魔人、魔神、天使、堕天使、巨人、魚人、妖怪、ゴーストの全17種の種族を選べることができる。

種族にはそれぞれ能力が違っており、

たとえば人間だったら特に目立ったものはないが平均的な能力。獣人だったら物理攻撃力が高いが魔法攻撃力が低い。

エルフだったら逆に魔法攻撃力が高く物理防御力が低い。

魔人だったらほぼ全ての能力が最高レベルだが、運がとにかく悪い。魔神はこれの強化版。

大体こんな感じだ。

その後

サーヴァント、ガーディアン、アサシン、侍、忍者、バーサーカー、ファイター、シルフ、アーチャー、ランサー、セイバー、ガンナー、マジシャン、アルケミスト、ネクロマンサー、テイマー、サモナー、死神、使徒、ボンバー、レスキュー、エクソシスト、神の全22種 + の職業から、はじめは一種類、Lvが100増えることにさらに種類最高レベルまで達して8種類が選べる。

しかし、死神はLv500、使徒はLv600、神はLv700にならないと選ぶことができない。

さらに、規定のレベルまで上げた後、職業クエストを受けると中級職、上級職、最上級職まであげることができる。

たとえばサーヴァントだったら中級職に傭兵、片手剣士、双剣士、レンジャーなどがある。

侍だったら上級職に上級武士、剛・浪人、新・歌舞伎者、刃・侠士、革・宣教師、派・仏教徒、豪剣、師範代などがある。

まあ、全部挙げるとすればもう限がない。

次に二つ目。

- 自由度が高い戦闘アクション -

このゲームでは他のゲームとは違いほぼ『全て』がプレイヤーの行動で実行される。

戦闘然り、剥ぎ取り然り、採集然り、鍛冶然り、e t c . . . 。

戦闘では基礎能力もあるが、基本プレイヤーの技能で優劣が決まる。だが、基礎能力が高ければ高いほど、スキルが多ければ多いほど、自由度が高まる。

無論、プレイヤー本人の身体能力もこのゲームには反映されるがLv1でできることはせいぜい50cmほど跳ぶことができるくらいだ。

だが、Lv100のプレイヤーが軽く跳ぶだけで5m跳べる。そして何よりこれには

『触覚』 『嗅覚』 『味覚』 『視覚』 『聴覚』 『第六感』

の五感+ のうち『味覚』以外全て感じられる。

剣や槍、剣銃や弓を握っていると言う 『触覚』

臭いをかくことで感じる事ができる 『嗅覚』

人の情報の8割を占めているという 『視覚』

目に見えないモノを感じられる 『聴覚』

漠然とした気配や危険を感じられる 『第六感』

これも今までのゲームには見られない。

最後に三つ目。

- 多種多様なスキル -

このゲームではプレイヤーの技能でほとんど決まるが、スキルの強さでその技能を上回ることができる。

たとえばLv5のプレイヤーとLv10のプレイヤーがいたとしよう。

ここでLv5のプレイヤーはLv10の初級スキル『スラッシュ』を覚えており、Lv10のプレイヤーは何も覚えていないとする。

身体能力は2人とも同じものとする。

この条件下で1vs1の戦いをするときりぎりではあるがLv5のほうが勝つ。

つまり、スキルを極めれば「おれTUEEEEEEE!!」もできると言うわけだ。

初級スキルは Lv1000まで

中級スキルは Lv500まで

上級スキルは Lv100まで

最上級スキルはLv50まで

鍛えることができる。

鍛冶スキル、薬剤スキルもこの中に含まれる。

まあ、いろいろと突っ込みたいところがあると思うが

大体はこんなところだ。

以上紹介終わり

ゲーム紹介（後書き）

批判は受け付けん！

誤字だけは別よろ

S K I L L M A X ! ! (前書き)

テストがやばい気がする今日この頃

S K I L L M A X ! !

とある森林

ここは『過去の遺産 英雄に受け継がれるもの』のアドベンチャーワールドの中でも
カンストプレイヤーご用達のマップだ。

その森林の中で今日も戦闘の音が鳴り響いている。

S i d e : ベ ル ム

「あつと少し、あつと少し」

おっす！

今日も今日とてスキルを上げている超重廃人プレイヤーことベルムだ。

実はもう少してスキルレベルがMAXになる。

・・・え？

そんなこと誰も聞いてないって？

まあまあ。

そこはとりあえず抑えて。

本名は白郷 久信だ。

何か武将の名前っぽくって俺はこの名前が好きだ。
名づけてくれた親には感謝が絶えない。

つとと。

話がそれたな。

そうそうスキルのことね。

俺は8種類の職業の内、7種類の職業スキルと一般スキルをMAXまで上げた。

この半年間毎日飽きずに良くやってこれたものだと自分でも感心(呆れ)している。

このスキル。

半年で7種類の職業スキルと一般スキルをMAXまであげたと簡単に言ったが

実際、そんなことができるのはたぶん俺だけだと思う。

スキルを上げる方法はいたって簡単。

一回技を放つことにより、1経験値たまる。

Lv2になるのに20

Lv3になるのに30

と、Lvが1上がることに必要になる経験値が10増える。

だから普通1つの職業スキルをMAXにするだけでも良くて半年、最悪4分の3年かかる。

じゃあ、何で俺がこんなに早くスキルをあげることができたかつて？それは、俺が序盤でスキル経験値+装備やスキル経験値×装備を運よく獲得することができたからである。

はじめは初級の中盤の中級モンスターを倒したことでスキル経験値

+3 装備を手に入れた。
その後、友達からスキル経験値 +2 装備を『もつと良いの手に入ったから』と言われ、譲り受けた。
その後、初級の中盤の最終ボス一歩手前に出てくる上級モンスターを倒してスキル経験値×5 装備を手に入れた。
最後に始めて課金したときに『最高級ガチャ』と言うものをまわしてスキル経験値×20 装備を手に入れた。

このときはさすがに俺でも自分の目を疑った。
あの時は目をこすり過ぎて、軽く炎症を起こした。

一回のスキル使用で500 経験値。
LV50 までは一回使用するだけでLVUP する。

まあ、経験値は繰り返しされるから一気にLV2とか3とか上がる
ときも多々あったがな。

ただ、これだけだったらまだ『お前メツチャ運いいな』ぐらいで
済ませる・・・と思う。

俺の場合はこれにさらに経験値×装備も追加だ。

まず皆中級職になってから始めての職業クエストでもらえる経験値
×2 装備。

その後初級の上級モンスターを倒して手に入れた経験値×5 装備。
なぜかイベントでもらえた経験値×8 装備。
乗りで行った上級ダンジョンで見つけた経験値×10 装備。

もうこん時は笑いが止まらなかった。(ありえない的な意味で)
まあ、そんな時は周りに誰もいなかったからよかったけど、冷静に考

えたら明らかに変な人だったよな、俺。

1 経験値で800 経験値獲得。

雑魚モンスターでも最低100は獲得できるのでもう経験値ガツポガツポ。

面白いくらいに速くLvがあがった。

4ヶ月でカンストしてしまったのは記憶に新しい。

そして、ついに今、スキルのほうもALL MAXになろうとしている。

「これで、終わり、だっ！」

そして、今俺の頭上に天使が舞った。

『おめでとございます！貴方はこの世界で始めてすべてのスキルLvをMAXにしました！よって、貴方には隠し職業【創造者^{クリエイター}】を贈呈します！本当におめでとございます！..』

・・・え？

またスキル上げなきゃアカンの？

S K I L L M A X ! ! (後書き)

批判は受け付けません

誤字の場合だけ受け付けます。

・・・これ、3回目だな

まあ、テキストに読んでください。

チートな職業を手に入れた(前書き)

つぎつぎ

チートな職業を手に入れた

Side:ベルム

【創造者】
クリエイター

・・・ついさつき手に入れた職業だ。

半年間このゲームをやっているが、そんな職業見たことも聞いたこともない。まあ、隠し職業って言ってたから当たり前かもしれないが。

と、ここでこの職業を軽く紹介しよう。

どうやらこの職業は武器や薬品の元となるもの、つまり鉱石やら薬草やらその他もろもろのものを作ることも造ることも創ることもできるらしい。

ここで考えてみよう。

作る・・・『作る』とは、一般に言う小規模なものを作ることだ。たとえば小学校のときにやった工作。あれもこの中に含まれる。『車』や『船』といった大規模な物は『作る』ではなく『造る』に分類される。

創る・・・一方『創る』とは、上記であげた『作る』や『造る』とちがって、新しく何かを創る、つまり自分の思い描いたものを造ることだ。たとえば、神話などで『空』やら『大地』を『創った』と記されている。要するに、未知の領域を『創造』することだ。

改めて今回手に入れた職業を見てみよう。

【クリエイター創造者】

・・・創造？マジで？

・・・コホン。
と、とりあえず能力の紹介をしよう。

だ、だれだ！いま『逃げたな』っていったやつ！出てこいや！
だって逃げるしかないじゃん！こんな名前からして反則臭がぶんぶんする職業を手に入れちゃったらさあゝ！

ま、まず紹介・・・はさつきそれっぽいこと全部言っちゃったしまあいつか。

じゃあ、スキルだな。

鉱石創造

1 / 100

薬草創造

1 / 100

宝石創造

1 / 100

ここまでが初級スキルだ。

・・・あれ？初級って1000までじゃなかったっけ？と思った人。

しょうがないじゃん！最初のスキルがこの三つだったんだからさあ！俺も見てびっくりしたよ！これだったらすぐあがんじゃない！

じゃ、じゃあ次だな

剣術系スキル創造	1 / 50
槍術系スキル創造	1 / 50
格闘系スキル創造	1 / 50
弓術系スキル創造	1 / 50
爆弾系スキル創造	1 / 50
盗賊系スキル創造	1 / 50
防御系スキル創造	1 / 50
銃術系スキル創造	1 / 50
暗殺系スキル創造	1 / 50
魔法系スキル創造	1 / 50
死術系スキル創造	1 / 50
錬金系スキル創造	1 / 50
召喚系スキル創造	1 / 50
神聖系スキル創造	1 / 50

・・・あれ？

職業関連あらかたあんじゃね？

うっわなにこれ。もうここまできたら何も言ひまじ、うっわ。

・・・これ全部最大まであげたらどうなんだろう？

よし、幸いMAXLEVEL1000はないからたぶん1〜2日あったら
楽にあがるだろ。

HPもMPも体力も気力も神力も霊力もやばいくらいある。もうホ
ントに。

ドンくらいかって？

名前：ベルム

HP：5387290

MP：5671340

体力：

気力：

神力：

靈力：2982310

112<105...。

チートな職業を手に入れた（後書き）

やりすぎっ？

いまさらですか

そんなこと

力とは？（前書き）

今日の午後

カラオケに行つてまいりますW

力とは？

とある郊外

職業の詳細を確認した日から2日経った。一応後神聖系スキル創造をMAXにすれば全スキルMAXにすることができる。

最初はこのく系スキルってどうやってあげていいか分からなかった。そのときは『既存のスキルにはない技を使えばいいのかな』と思っていた。

果たして結果はその通りだった。

たとえば剣術系スキル。

主なスキルは『スラッシュ』『連続切り』『フェイント』がある。このスキルは気力消費も少なく、初心者は大変重宝するスキルである。

そういえば、スキル発動の条件を言ってなかったな。

・・・べ、別に忘れてたわけじゃないんだからねっ！

・・・おえ。

やって2秒で後悔した。2秒も持った自分を誉めてやりたい。むしろ誉めて！

・・・話がそれだな。

で、発動の条件だったよな。

発動には主に4種類の方法がある。

1. 『気力での発動』

主に剣術系スキルや槍術系スキル、格闘系スキルを発動するときに必要な『気力』を使ったスキル発動。

『気力』はプレイヤーのヤル気や意志の強さ、身体の強さによって総量上がる。つまり、Lv10のヘタレより、Lv1の死ぬ覚悟があるやつのほうが『気力』の総量が多い。

で、この『気力』というやつには2つ種類がある。

1つ目。

主に『内気』と言われるやつだ。

これはさつき説明した通り、ヤル気や意志の強さ、身体の強さによって決まる『気力』だ。自然回復である程度速度で回復することが可能。

2つ目。

主に『外気』と言われるやつだ。

これはプレイヤーの強さに関係なく、フィールドの『自然』エネルギー総量で決まってくる。

『外気』はそのフィールドの中にある『自然』エネルギーを『気力』に変換し、その変換した『気力』を取り込みスキルを発動させる。だから、取り込んだ『自然』エネルギーの総量によって『本来の威力以上の攻撃力になった』と言うのもざらにある。

つまり何が言いたいかというと、いくらヤル気や意志がなくても、この『外気』の運用に長けていたら十分補えるくらい厄介なものなのだ。つか、お釣り来る。

だが、この『外気』を使うにはかなりの技力が必要なようで、いままで見えてきた中でも運用に長けていた人は一人しか知らない。失敗したら逆に『内気』を取り込もうとしたぶん失ってしまうので、慎重にならざるをえないからな。

つつても、『外気』を使えるのは獣人を選択したプレイヤーや上級職に達している一部のプレイヤーだけだね。

2・『MP（マジックポイント＝魔力）での発動』

これはどのオンラインゲームでも使われている『MP』を使ったスキルの発動だ。

この世界では、主にマジシャンやアルケミス、サモナーといわれる職業が使用する。

マジシャンは五大元素のほかにヒールやエンチャントの使用のときに、アルケミスは物質の交換や昇格、精錬のときに、サモナーは召喚のときに使用する。

まあ、オンラインゲームを知っていると大体のことはわかる。もちろん自然回復もある。

ちなみにこの世界の最上級魔法の中で一番食らうMP消費量が58000。

余談だが俺の1秒間の『MP』の回復量は72000だ。

・・・ニヤリ。

3・『霊力での発動』

『霊力』はネクロマンサーや死神のスキルを使うときに必要になる。

それ以外はほとんど使用しない代物である。

なので戦士職は基本この値は0だ。

『靈力』はとても使いどころが難しいものだ。総量が少ないのもちろんのこと、スキル発動時の消費量が多い、自然回復しないなど、玄人向けの力であることが窺える。

『靈力』を回復するには一般スキル『瞑想』をする必要がある、瞑想中は戦闘や回復などができなくなる。つまり、無防備になる。敵さんの目の前でしたひにゃく、攻撃してください、って言うてるもんだ。

だが、その分一発の効果が恐ろしい。相手の行動を一時的に封印したり、アイテムの使用を不可能にしたり、『呪い』をかけてHPやMPを削り続けたり……。

ハイリスクハイリターンのこの職業は最初こそ人気なかったが、団体戦において驚異的な戦闘力を誇る。なんせ、1度にフィールドにいる相手プレイヤーHPやMPをガリガリ削りまくることができ。そのせいから『1ギルド10ネクロマンサー』って言葉もできた。まあ、それを広めたのは俺なんだがな。

4・『神力での発動』

これは主に執行人主任（エクソシストの最上級職業）や使徒、神など聖職業の中でも上位に位置するものしか使えない。

この『神力』も『靈力』同様、自然回復しない。しかも、フィールドで回復することができず、町に戻っていちいち教会に行かなけ

ればならない。

その分威力は『靈力』を使ったときよりもすごい。もとい酷い。

一度試したがLv550のモンスター15体に神の広範囲中級スキル『神の啓示』Lv300を使ったら、1発で全滅した。

あときは開いた口がふさがらなかったね。

だって中級だぜ？しかも、広範囲攻撃仕様……。もはやバグだね。

もちろんドロップしたアイテムは格安で他のプレイヤーに売った。

その光景を見ていたほかのプレイヤーが『神がいるぞー！』とか騒いでいたが俺は気にせずその場を後にした。

だって俺、職業、神だし。

力とは？（後書き）

アルチエミストではなくアルケミストにしたのはなんとなくです。

間違いではありません。

チート万歳・・・なわけある！（前書き）

あるんかい！

チート万歳・・・なわけある！

そういえば、前回創造者のスキルの上げ方の説明をしていなかったな。

前日も言ったように『既存にないスキル』を使ってすぎるLVをあげるようになってる。

剣士系スキルであつたら『連続切り』や『スラッシュ』はあるが『十字切り』や『真空切り』という技はない。

そこで、スキル画面を開いて剣術系スキル創造にカーソルを合わせてみる。もちろん視線で。

『技名を入力してください』

と、ログが出る。

そこでさっき『既存にないスキル』の名前を入力する。

『【十字切り】でよろしいですか？』

Yes .

『かしこまりました』

これで設定完了。あとは、この技名を言いながら技を放つだけ。そうすれば一回放つごとにスキル経験値がたまっていく。

だが、この『系スキル創造』と言うのはLv10になることに新しい技を考え、発動しなければならない。

だから、スキルLvをMAXにあげるには最低でも10個新しい技を考えなければならない。これには結構苦労すると思ったが、意外も意外。結構すんなり出てきた。

・・・俺、まだ中二治ってないのかなあ。

まあ、治る気もさらさらないけどな！

あ、なんか中二病を嫌ってる人が高二病で、「中二病嫌ってる高二病ってみつともないよな」と思うのが大ニ病らしい。

中二（中学のだよ！決して病気ではない）のとき初めて知った。

つとと、話は戻すけど。

この技考えるの。これが結構楽しくてね。こう「エターナルフォースブリザード！」とかネタでやりたいわけよ。したら、「あゝこんなネタもやってみたいな」とか考え出して、ポンポン出たわけだ。

おっと、危ない。

いま俺戦闘中だった。相手はLv750のヴァンパイア（プレイヤ
ーにあらず）。俺はさすが神聖系スキル創造で創った『光の雨』
を使って反撃に出る。効果は抜群だ！

説明しよう！

『光の雨』とは、その名の通り『光』の『雨』を降らせること。た
だ、降らせるのは『雨』ではなく『剣』や『槍』などの武器だが。

閑話休題

だが、敵も最上級中級モンスター。一発では3分の1も減らない。
だが俺は懲りずに連続で唱え・・・ない！

なぜか？

それはね・・・

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....俺が無詠唱で魔法を使えるからだ！

何か知らんがマジシヤンの最上級職業『スペルマスター』のスキル『詠唱時間短縮』をMAXまであげたらいつの間にかスキル『無詠唱』になっていた。それとなぜか『二重詠唱』も追加されていた。

ついでつぽく言ったが『二重詠唱』とは、まさしく『反則』級のスキルである。ただでさえ高レベルスキルMAXはもはや無敵と言えるのに、そこに『二重詠唱』が加わる。

考えてみて欲しい。学校の席替えで嫌いなやつが隣になるだけでなく、前後も嫌いなやつになるという絶望。しかもそれが3ヶ月ほど続く.....。

わかっていただけだろうか？

え？

わかりにくいつて？

まあ、なんとなく分かればいいんだよ。

ほらあれだ。自転車のサドルに蜘蛛が乗っていたときの絶望感だ。

あの時は母さんに速攻で潰してもらったね。だって虫嫌いだし。

閑話休題・・・本日二回目。

そういえばスキルMAXになったらどうなるか言っていなかったな。

ダメだ。このごろ忘れものが酷い。

ま、まあ、気を取り直して。

スキルMAXにするとLv1のときの力などの消費量で『さまざま
なLvのときのスキル』を発動することができる。

たとえばマジシャンの初級スキル『ファイア』のLv1の消費MPは15で攻撃力は25～30だ。これのLv500のMP消費は515で攻撃力は525～530だ。これのスキルLvをMAXまであげた場合、消費MPは15のままLv500の攻撃力、つまり525～530ダメージを敵に与えることができる。初めて知ったときは1分ぐらいフリーズしていた。もちろんアドベンチャーフ

イールドでそんなことをしていたらザコモンスターに体力をガリガリ削られる(つつても最高150ぐらい)わけで。何とか持ち直して敵を殲滅したشだいでございます。

あ、神聖系スキル創造LVMAXになった。

『おめでとつございます！創造者スキルをすべてMAXにした貴方にはこれを贈呈します！』

アイテム

神の涙 (アイテム)

神の国への通行書 (アイテム)

創造主認定書

武器・防具

フレイの聖剣 +10

(物攻 : 300000 腕力 : 820 防備 : 640 耐久値 0 / 0)

オーデインの真槍 +10

(物攻 : 280000 腕力 : 760 防備 : 700 耐久値 0 / 0)

エヌルタの戦手甲 + 10
 (物攻 : 290000 腕力 : 950 俊敏 : 510 耐久値 0 / 0)
 イムホテプ の魔杖 + 10
 (魔攻 : 250000 知恵 : 750 防備 : 710 耐久値 0 / 0)
 タナトスの死鎌 + 10
 (物攻 : 270000 魔攻 : 150000 俊敏 : 920 耐久値 0 / 0)
 オメテオトルの王冠 + 10
 (知恵 : 800 防備 : 800 運 : 700 経験値 × 10)
 アトウムの鎧 + 10
 (防備 : 800 俊敏 : 800 運 : 700 経験値 × 10)
 アイテールの肩当 + 10
 (防備 : 800 全耐性 : 800 運 : 700 経験値 × 10)
 ブラフマーの手袋 + 10
 (腕力 : 800 防備 : 800 運 : 700 経験値 × 10)
 フラカンの脚鎧 + 10
 (防備 : 800 俊敏 : 800 運 : 700 経験値 × 10)
 ソロモンの指輪 + 10
 (魔攻 : 20000 知恵 : 800 スキル経験値 × 10)

アーサーの首飾り+10

(物攻:20000 腕力:800 スキル経験値×10)

ペラーヨの腕輪+10

(魅力:3000 運:500 スキル経験値×10)

ネロの足飾り+10

(魅力:3000 運:500 スキル経験値×10)

・・・もう、ゴールしてもいいよね？

チート万歳・・・なわけある！（後書き）

ふい

もうやりすぎたけど

こんくらいしないと

無茶できないから

やったったぜ！

最強が最強になりました(前書き)

最強が最強？

最強が最強になりました

Side:ベルム

ども。

またまた皆のベルムさんがログインしましたよ。

昨日はあまりにも衝撃過ぎてあの状態のまんまいつの間にかログアウトして寝てた。まあ、いまは長期休暇（夏休み）中なんで、いつ寝たり起きたりしても大丈夫だからこんなことできるんだけどね。

宿題？そんなもの始まって最初の一週間で終わらせたがな。あのゲームやってる所為かわかんないけど半年前から勉強がわかりすぎて逆に困ってる。特に魔法系職業育ててるときはやばかった。何か取り入れた情報をポンポン理解していつてるんだもん。あん時もフリーズしたね。おかげで怒られたけど。

閑話休題

あの後そのまんまだったアイテム、武器・防具を改めてみる。

アイテム

神の涙（アイテム）

神の国への通行書（アイテム）

創造主認定書

武器・防具

フレイの聖剣+10

(物攻:300000 腕力:820 防備:640 耐久値0/0)

オーデインの真槍+10

(物攻:280000 腕力:760 防備:700 耐久値0/0)

エヌルタの戦手甲+10

(物攻:290000 腕力:950 俊敏:510 耐久値0/0)

イムホテプの魔杖+10

(魔攻:250000 知恵:750 防備:710 耐久値0/0)

タナトスの死鎌+10

(物攻:270000 魔攻:150000 俊敏:920 耐久値0/0)

オメテオトルの王冠+10

(知恵:800 防備:800 運:700 経験値×10)

アトウムの鎧+10

(防備:800 俊敏:800 運:700 経験値×10)

アイテールの肩当 +10

(防備：800 全耐性：800 運：700 経験値×10)

ブラフマーの手袋 +10

(腕力：800 防備：800 運：700 経験値×10)

フラカンの脚鎧 +10

(防備：800 俊敏：800 運：700 経験値×10)

ソロモンの指輪 +10

(魔攻：20000 知恵：800 スキル経験値×10)

アーサーの首飾り +10

(物攻：20000 腕力：800 スキル経験値×10)

ペラーヨの腕輪 +10

(魅力：3000 運：500 スキル経験値×10)

ネ口の足飾り +10

(魅力：3000 運：500 スキル経験値×10)

・・・改めてチート装備と言うことがわかった。

だが、詳細がいまいち漠然としていてわからないから、ここでこのアイテム！

『オーディンの片目』×2

そう！

ミールルの泉の水を飲んで、全知と魔術を手に入れたオーディン。しかし、その代償として片目を失ってしまう。

と言うのは有名な神話。

そしてこの『オーディンの片目』と言うのはその時代償になった目だ。

このアイテムは『目』につけるアクセサリだ。決して消耗品ではない。

能力は『モノの詳細を知ることができる』と『知恵：500』だ。

一応オーディンシリーズはすべてユニークアイテムとされており、いつのアイテムにつき10人持つていれればいいほうだ。このアイテムのほかに『オーディンの槍』『オーディンの髭』『オーディンの神服』『オーディンのローブ』『オーディンの帽子』『オーディンの靴』などがある。

これは最上級最上級モンスターLv850フェンリルを倒したときに1000分の1の確立でドロップするアイテムだ。

まあ、俺は一応全部持っているがな。運とか全開だったし。

と、いうわけで早速この目でアイテムを見てみましょう。

神の涙

詳細：HP・MP・体力・気力・神力・霊力すべて全回復する。死んだものも同様全快の状態で生き返る。状態異常なども治せる。

・・・こ、こ、これはああああああああああ！

薬剤師泣かせアイテムキターああああああああああ！

まさかの全快！もうこれで怖いもの無しだね！

って思ったけどダメじゃネこれ？こんなの卑怯過ぎてつかえんわ。

・・・よし。このアイテムはホントどうしようもない時に使おう。
それまで封印。

それ、封印倉庫にマル投げジャーイ。

封印倉庫

スペルマスター（マジシャンの最上級職業）のスキルをMAXにしたときに覚えた亜空間攻撃を応用して使っている魔法。この倉庫のほかに消費アイテム・武器・防具・食料・ドロップアイテム・クエストアイテム・創造アイテムなど専用の倉庫がある。倉庫のほか

にも、鍛冶倉・調合室・飼育室などといったものもある。

はい、じゃあ次。

神の国への通行書

詳細：新しく増える特殊フィールド『ヴァルハラ』 『ミスガルズ』
『アースガルズ』 『ヨトウン Heim』 『ヘル Heim』 『ニヴル Heim』 『ユグドラシル』への通行を許可するカード。

うん、まあそんなことだろうと思ったよ。『神の国ってどこだよ！』って思ったけど冷静に考えたら『これは新しいフィールドのことなんじゃないか』って普通に出たからね。まさか当たるなんて思っ
ってなかったんだけどね。

『ヴァルハラ』

ヴァルハラはグラス Heim があり、ヴァルキュリヤによって選別された戦士の魂が集められる。^{エインヘリヤル}レーラスの影が落ちるこの宮殿には、540の扉、槍の壁、楯の屋根、鎧に覆われた長椅子があり、狼と鷲がうろついているという。これは、戦場の暗喩である。館の中では戦と饗宴が行われ、ラグナロクに備える。また、この館には雄鶏のグリーンカムビ（黄金の鶏冠）が住んでいる。

『グリームニルの言葉』第8節には、次のような事が書かれてい

る。

“ 黄金色に輝くヴァルハラが広々と建っている第5の場所はグ
ズヘイムと呼ばれている。

フロプト（オーディンの別名）がそこで戦死者を選んでいる。

西の扉の前に狼がぶら下がっていてその上空を鷲が飛んでいる。”

オーディンは狼のゲリとフレキおよびワタリガラスのフギンとム
ニンを従えて、この館の王座につくとされる。（出典：Wikip
edia）

『ミズガルズ』

ミズガルズは、「中央の囲い」を意味する北欧神話に登場する人
間の住む領域。

ミズガルズはユグドラシルの中央周辺にあると描写されており天
上のアースガルズと地下のヘルヘイムに挟まれ、ミズガルズとア
スガルズは虹の橋ビフレストによってつながっている。

ミズガルズの周囲は水または海洋で囲まれており、その外側には
ヨトウンヘイムが存在する。 巨大な蛇ヨルムガンドはミズガル
ズに収まりきらず海洋の中でミズガルズをぐるりと取り囲んで、己
の頭で己の尾をくわえている。

アースガルズ外側には魔的存在が住むウートガルズがある。（出典：
Wikipedia）

『アースガルズ』

アースガルズは北欧神話に登場するアース神族の王国。死すべき定めの人間の世界 ミズガルズの一部であるともいわれる。

アースガルズを囲む壁は巨人と巨人の所有する馬であるスヴァジルフアリによって建てられた。

地上からアースガルズに行くためには虹の橋ビフレストを渡る（『ギユルヴィたぶらかし』第13章）。ビフレストのそばにおりアースガルズの門番をつとめるのはヘイムダルである（『ギユルヴィたぶらかし』第27章）。

また、アースガルズの中にはイザヴェルと呼ばれる平原がある（『ギユルヴィたぶらかし』第14章）。アース神族は重要な問題や会議があるとそこに集う。

男性の神々が集まる館をグラス Heim、そして、女性の神々が集まる館をヴィー Ngorlv と呼ぶ（『ギユルヴィたぶらかし』第14章）。

神々はまた毎日ビフレストを渡り、ユグドラシルの下に住むウルズと会う（『ギユルヴィたぶらかし』第15章）。（出典：Wik i p e d i a）

『ヨトウン Heim』

ヨトウンヘイムは北欧神話に登場する「ヨトウン」と呼ばれる霜の巨人族と丘の巨人族が住む国である。

『古エツダ』や『スノツリのエツダ』に散見される記述では、ヨトウンヘイムは東に位置するとされている。また、人々の住むミスガルズと神々の住むアースガルズの脅威となっている。ミスガルズとヨトウンヘイムの間にはイヴィング川が流れている。

主要都市としてはウートガルザ・ロキの治めるウートガルズがあり、ほかにメングラッドのすむガストロープニル、そしてスイアチの住むスリュムヘイムがある。ヨトウンヘイムを支配する王はスリュムという。

『古エツダ』の『巫女の予言』によれば、この国から「忌まわしき3人の巨人の娘」が来るまでは、神々は黄金でできたもので欠けた物はなかったという。また、ラグナロクの到来時には、神々や妖精だけではなくヨトウンヘイム全土もどよめくという。

なお、ノルウエーにはスカンディナヴィア山脈に属するヨートウンハイメン山地が実在し、これはスカンディナヴィア半島でもっとも高い山であるガルフピッゲンを含んでいる。(出典: Wikipedia)

『ヘルヘイム』

ヘルヘイムは、北欧神話に登場する世界のひとつで、ロキの娘・ヘルが治め、ユグドラシルの地下にあるといわれる死者の国。ニヴルヘイムと同一視される。

時に「ヘル」(『アルヴィーアの言葉』第32節など)、「ニヴルヘル」(『ヴァフスルーズニルの言葉』第43節など)とも呼ばれる。(出典:Wikimedia)

『ニヴルヘイム』

ニヴルヘイムは、北欧神話の九つの世界のうち、下層に存在するとされる冷たい氷の国。ギンヌンガガブと呼ばれる亀裂を挟んでムスペルヘイムの北方にある。ロキの娘ヘルが投げ込まれた場所であり、時にヘルヘイムと同一視される。

天地創造以前から存在し、ニヴルヘイムには世界樹の根の一つが伸びているが、その下にはフヴェルゲルミルと呼ばれる泉がある。

この泉には世界樹の根を齧るニドヘグという蛇が住み、フヴェルゲスヴォル、グンスラー、フィヨルム、フィンブルスル、スリース、フリーズ、シュルグ、ユルグ、ヴィーズ、レイプト、ギヨツルなどの川の源とされているが、このうちギヨツルがニヴルヘイムとヘルヘイムを隔てている。そこにはギャラルブルという黄金の橋が架かっており、モーズグズという女巨人が守っていると考えられていた。

また、ニヴルヘイムにはエーリヴァーガルという川があり、凍りながら北のギンヌンガガブに至るとされている。(出典:Wikimedia)

『ユグドラシル』

ユグドラシルは、北欧神話に登場する1本の架空の木。

世界を体現する巨大な木であり、アースガルズ、ミズガルズ、ウートガルズ、ヘルヘイムなどの九つの世界を内包する存在とされる。

三つの根が幹を支えている。『グリームニルの言葉』第31節によると、それぞれの下にヘルヘイム、霜の巨人、人間が住んでいる。また『ギルヴィたぶらかし』での説明では、根はアースガルズ、霜の巨人の住む世界、ニヴルヘイムの上へと通じている。アースガルズに向かう根のすぐ下には神聖なウルズの泉があり、霜の巨人の元へ向かう根のすぐ下にはミーミルの泉がある。

この木に棲む栗鼠のラタトスクが各々の世界間に情報を伝えるメツセンジャーとなっている。木の頂きには一羽の鷲フレイスヴェルグとされるが留まっております、その眼の間にヴェズルフエルニルと呼ばれる鷹が止まっております。

ユグドラシルの根は、蛇のニーズヘッグによって齧られている。また、ダーインとドヴァリン、ドゥネイルとドゥラスロールという四頭の牡鹿がユグドラシルの樹皮を食料としている。また、『グリームニルの言葉』第25節によると、山羊のヘイズルーンがレーラズという樹木の葉を食料にしているとされるが、レーラズがユグドラシルと同じ樹木かははっきりしていない。(出典: Wikipedia dia)

ちょっと詳しく過ぎる気がしないでもない。つか詳しく過ぎ。

じゃ、次ぎ言ってみよう……。

創造主認定書

詳細：創造者の最上級職業。もともと創造者は上級職業なのでこれ以上上はない。この職業になると、造れるものが伝説級から神・究極になる。それと身体Lv上限がなくなる。

・・・もう俺疲れた。

最強が最強になりました(後書き)

ははは

Wikiさんにはいつもお世話になってます

「う、うだね・・・」（前巻）

今回も無茶やっちゃいます

「う、これは・・・！」

Side:ベルム

やあ、午前は装備説明の前半で力尽きたベルムだ。
さっきまで飯食ってたわ。

いやー、やっぱり麻婆豆腐は最高だね！俺、卵とネギと豆腐とにんにくとじゃがいもと辛いもの好きだからこの料理には運命を感じるね。もう俺のためにある料理といっても過言では・・・あるか。

え？

何でこんな暑い中そんな熱いものを食べるかって？（この世界ではいま夏休み）

そんなの・・・。

そんなのっ！

そこに麻婆豆腐があるからだろう！

・・・え？

なに『そこに山があるからだ』みたいなノリで言ってるの？
いいじゃん。ノリサイコー。

・・・コホン。

とまあ、冗談（結構本気）はさておき。

俺ははっきり言ってもうアイテムの説明は要らないと思う。

だってあんな長たらしい説明見なきゃいけないんだぜ？お前らだ
つていやだろ？俺はいやだ。つか、はっきり言って面倒。しかも疲
れるしな。

え？

本音駄々漏れ？

俺はぶっちゃけるときはぶっちゃける男だ。あしからず。

とまあ、こんな理由だから説明はもういいだろ。

よし。

じゃあ、改めてスキルを眺めてみるぜ。

スキル眺め

あまりにも多いから省かせてもらっぜ。

いやー、にしてもよく俺全部MAXにできたよな！。

普通の人（スキル経験値× ∞ 持ってない人）だったら、間違いなく発狂する量だぜこりゃ。

まずひとつの職業の初級スキルが15個。

中級スキルが10個。

上級スキルが5個。

最上級スキルが3個。

これを全部足して8掛けたら264個になるからな。

平均1つのスキルMAXにするのにLv500分（12740回）の攻撃をしたとしたら全部MAXにするまで101920回スキルを繰り返さないといけない。

俺もこの装備なかったら発狂していたな。

スキル眺めち

「あゝ、こんなのもあったな」

「ああ、そうそういつでフェンリルにとどめさせたんだ」

「ブツッ！？ちょ、これエロくね？」

ふうだいたい見終わった……な………？

『多重詠唱』

/
』

つとど。

あぶねえ。危うく暴走しかけた。

で

『多重詠唱』

てのもたぶんその名の通りのスキルなんだろうな。はっきりいつてこれ使ったら最終鬼畜の人も全力で引くくらい鬼畜になりそうだな。まあ、ありがたく使わせてもらっけど。

ふう、ここ最近疲れることがいっぱいあるぜ。

何かログインするたびに

『神になりたくありませんか？』

って言う声が聞こえるんだよ。まあ、なんかのバグだとおっもて俺は気にしてないけど、他のやつに聞いても『は？なんですかそれ？』って返してくるし。(ベルムはRANK1位のギルマスで、皆に尊敬されているため基本敬語で会話)

まあいつかー

この後、この声の所為であんなことになるとも知らずに暢気なベルムであった。

「う、これは・・・！」（後書き）

ふい

やっと始まりが見えてきた。

下書きも無しで、30分〜1時間半で書くからどうしても内容が薄くなっちまうぜ。

みてくれてるみんな

ホントごめんよ〜

始まりはとてとても自然なもので（前書き）

できれば自然に異世界に生きたい

始まりはとてとても自然なもので

Side:ベルム

やあ、今日も今日とてログインしているベルムだ。

昨日はあの後『多重詠唱』がどんなものか確認していた。

確認した結果

やはり『多重詠唱』はチートだった！

『多重詠唱』・・・その名のとおりに魔法を幾重にも同時に発動することができるスキル。このときに必要になってくるのは、スキルを発動するための『魔力』と詠唱する時間が必要となる。このスキルは一度に発動するため普通にスキルを使った場合の2倍の『魔力』が必要になる。

『多重詠唱』の詳細はこんなところだ。

だが。

駄菓子菓子！

失礼。

だがしかし！

俺はものすごく膨大な『魔力』にスキル『無詠唱』を持っているから一瞬で何十何百もの魔法を展開することができる。

実際、昨日ふざけ半分遊び半分でやって初級魔法百個ぐらい出して後悔したからな。

ま、まあ、過ぎたことはそこらへんに投げ捨てて。

今日は身体Lvをあげてみようかと思う。もちろんあの装備で。

・・・これはすぐLvがあがる予感。

Lv上げ中

・・・あの装備マジばねえ。

マジパネエ!!!!!!

あにあのLvの上がる速度!マジ早すぎるって!

フェンリル1匹倒しただけでLv12上がった・・・。

まあ、あの装備手に入れる前に手に入れた装備(今まで使ってたやつ)もつけたまんまでやったから、すぐ上がるのも当然か。

ちょっと計算してみよう。

$$\begin{aligned} & 10 \times 8 \times 5 \times 2 \\ & \parallel 10000000 \times 8 \times 10 \\ & \parallel 8000000000 \end{aligned}$$

8千万倍・・・。

やべえ、笑えネエ。

これやりすぎだ・・・。orz

まあ、自重する気ないけどなっ！

ふう、今日はもう疲れた。

昼食食べてからまたログインしよう。

今日の昼食はカレーだぜ！

暑いときに食べるカレーは最高だ！

暑いときに熱い（ry

・・・あれ？これ前も言ったような？

まあ、いつか

それじゃあログアウトだ。

『ログアウトしますか？』

Yes .

『ログアウトします』

おっく

~~~~~

・・・ん？

無事ログアウトできたようだ・・・な・・・？

『俺はあたりを見渡した！』

周りは木木木岩。

・・・は？

ここ・・・どこだ・・・？

ここから俺の新たな物語が始まる・・・かも・・・しれない・・・。

始まったら・・・いいな・・・。

始まりはとてもとても自然なもので（後書き）

今日は短いな

いや、『も』か？

まあ、いつか

1111はさんせら (前書き)

なんかいつの間にか

10000PV超えていたと言うホラー・・・。

ありがとうございます

「じいちゃんやう

Side:ベルム

・・・やあ。

何かなんだか今の状況がいまいち理解できていないベルム・・・いや、ここは白郷 久信といったほうがいいのか？

ん、んんっ。

ここは定番のあれやるか？

・・・よしやろっ。

今やろっ。

今すぐやろっ！

準備中

あ、ありのままいま起こったことを話すぜ！

俺がそろそろログアウトして寝ようかなと思ってログアウトしたら、目の前が森だった！何が言いたいかわからない？俺もわからない！

・・・まあ、こんな感じだ。

俺も良い感じに混乱してるからちょっと待っててくれ。

・・・よし、いくらか落ち着いたぞ。

まず、だ。この森。なんか見覚えある。

そうあれは俺がまだ                    って、ここ    迷いの森    だ！

### 迷いの森

迷いの森    はこのゲーム    『過去の遺産    英雄に受け継がれるもの』    の中級ダンジョンの中で最も簡単とされるダンジョンだ。    迷いの森    なんてたいそうな名前がついているが、決まった道を進めば別に迷ったりしない。    つか、まっすぐ突っ切ろうと思わない限り迷わない。    この森は『直線切り抜け防止結界』が常時張られている。    マジシャンの上級職に転職すれば、見ただけでわかる。

おおっ。

懐かしいわけだ。

最後に入ったのが4ヶ月前だ。    いや、もっと前かもしれない。

とりあえず近くにあった岩に座ってあたりを見渡してみる。

・・・ふむ。

どうやらここは迷いの森の右端みたいだ。

何でわかったかって？

魔法スキルの中には『探査魔法』なるものがあるからな。

それに一応おれ自身で作ったメツチャ細かい地図持ってるし。

いまは倉庫の中に入ってるけど、取り出そうと思えばいつでも取り出せる。

・・・までよ？

冷静になってみれば、俺ログアウトしたはずなのにここにいるのは  
おかしくないか？

とりあえずログアウトできるか試してみるか。

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・できない。

まあ、薄々気づいていたからそんなに残念ではない。

じゃあ、ステータスウィンドウは開けるか？

まあ、開けなくても

名前 : ベルム

HP : 5387290

MP : 5671340

体力 :

|           |           |           |           |           |           |           |                                                                                                     |          |    |    |
|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------|----------|----|----|
| 運         | 魅力        | 全耐性       | 俊敏        | 防備        | 知恵        | 腕力        | 職業                                                                                                  | 霊力       | 神力 | 気力 |
| ・2409+710 | ・1558+270 | ・1200+250 | ・2456+330 | ・2003+520 | ・1422+450 | ・1687+420 | ・心・武器に愛されし者<br>・鋼・鉄壁要塞<br>・殺・元祖アサシン<br>・スペルマスター<br>・理・自然の理解者<br>・常識を超えし者<br>・獄・断罪者<br>・皇・大神<br>・創造主 | ・2982310 | ・  | ・  |

所持金：47459173700  
00ネルス）  
Ne（474億5917万37

まあ、いろいろ聞きたいことはあるだろう。

なんだその職業は

とか

なんだその基礎ステータスは

とか

所持金が何でそんなにあんだ

などなど

「言っただけだ。」

俺は強いやつしか倒さない！

1111ばんしやら (後書き)

ははは

このくらないと我慢できない自分はおかしい

とじあえず

Side:ベルム

やあ、さっきステータス確認したベルムだ。

いま俺はまだ岩の上に座っている。

もうこの状況にはなれたな。ここはたぶんゲームの世界。でも、ログアウトできないことから、ここは『異世界』とかいわれるものかもしれない。ただ、気になることがひとつだけある。

それは

魔物がぜんぜん寄ってこないっ！

なんで！何でなんだ！

いるにはいるんだよ結構近くに。『探査魔法』使ってるからどこにいるからk m以内なら完璧に把握できる。いまもこちらをこちら

ら見ている魔物が3匹ほど……。

「どろして寄ってこないっ！」

びっくっ!?

………あ、逃げた。

俺そんなに近寄りがたいかな?これでも結構魔物には好かれるんだけどな。

え?

何でかって?

それはね。

常に職業『理・自然の理解者』の能力が発動しているからなんだ。

職業『理・自然の理解者』

この職業は『サモナー』の最上級職業。ほぼ全てのモンスターを召喚し手なずけたものの証。そのため、常に魔物や妖精、植物に対して好まれる匂いを発している。テイマーの最上級職業『喜・生物愛護会会長』も同じ効果を得ることができる。

理解いただけただろうか？

まあそつだね。

こつという特殊能力は最上級職業全てにあるよ。

じゃあ、昨日の続きか？

まずステータス

名前：ベルム

HP：5387290

MP：5671340

体力：

気力：

神力：

霊力：2982310

職業  
 ・心・武器に愛されし者  
 ・鋼・鉄壁要塞  
 ・殺・元祖アサシン  
 ・スペルマスター  
 ・理・自然の理解者  
 ・常識を超えし者  
 ・獄・断罪者  
 ・皇・大神  
 ・創造主

腕力 : 1687 + 420  
 知恵 : 1422 + 450  
 防備 : 2003 + 520  
 俊敏 : 2456 + 330  
 全耐性 : 1200 + 250  
 魅力 : 1558 + 270  
 運 : 2409 + 710  
 所持金 : 47459173700  
 Ne (474億5917万3700ネルス)

まず名前はいはずもがなベルムだ。

次。

HP・MPもこの前説明したよな？

職業によって増える値は違っけど全ての職業を最上級職業にしたら大体こんな感じになる。

体力とか気力とか神力は職業『皇・大神』を手に入れたらなんかあった、とだけ言うておこつ。

次。

職業についてだな。

一応俺の職業は

サーバント

ガーディアン

アサシン

マジシャン

サモナー

アルケミスト  
死神  
神  
創造者

の最上級職業だ。

特殊能力は………めんどいからいいか。

まあ、またあとで暇だったら紹介するか。

まあ、簡単に説明すると

|        |       |
|--------|-------|
| サーバント  | ：反射神経 |
| ガーディアン | ：鋼の身体 |
| アサシン   | ：隠密   |
| マジシャン  | ：詠唱   |
| サモナー   | ：体質   |
| アルケミスト | ：対価   |
| 死神     | ：即死   |
| 神      | ：裁き   |
| 創造者    | ：創造   |

てなところかな。

次。

基礎ステータスについて。

これはさすがに俺以外こんな値にできたやつはいないと思う。

まず俺はLv800まで上げた。

この時点で半年でできたやつなんて俺だけだと思う。

んで、ステータスUPアイテムを使いまくった。

ボス級を倒すと結構な確率で落とすから100個以上使ったかもし  
れん。

(と言っても、実際の確率は220分の1)

あと、強いやつを倒しまくった。

どうやらこのゲームには熟練度なるものがあるらしく、強いやつ  
を倒せば倒すほど上がるらしい。まあ、実際フェンリルばっか倒し  
ていたらいつの間にか基礎ステータスが上がっていたなんてことは

ざらにあった。

じゃあ、この＋＋＋ってやつはなんなのかって言うと、これは防具の補正值だな。

ん？

何でこんなに少ないのかって？

あの防具はどうしたって？

ああ、いま俺は自分で作った装備を着ているからな。 m a d e i  
n 俺 だ。

ちなみに全部＋10だ。

何でそんなもの着てるかって？

そりやお前、あんなモン着たまんまログアウトして、次ログインしたとき近くに他のプレイヤーがいたらどうなるか考えてみる。

まず間違いなくなんか言われるな。

俺はそれがいやでこんな装備にしている。

でもこれ結構動きやすいからお気に入りではある。

皮装備サイコー！

次。

お金について。

これはクエストとか高級素材とか自前の武器・防具を売ったからとしか答えられない。

基本ほとんど自分で作ってるから買うものがなかったし、特に気にせず売ってたらいつの間にかこんな大金になっていた。俺もびっくりだ。

まだ、俺の素材倉庫に腐るほどいっぱいあるからこれ売ったらどうなるか想像しなくても結果は見えてるな。

まあ、こんなところだ。

さて、次は何をしようかね。

……ってまずはこっからでないとな。

とりあえず(後書き)

ふう

疲れたぜ

出たばかり・・・いろいろなテンプレート？（前書き）

テンプレートテンプレート

出れたけど・・・これなんてテンプレ？

Side:ベルム

やあ、やっと森から出ることができたベルムだ。

結構複雑な道だったから出するのに苦労したぜ。

まあ、体力とか何それおいしいの？状態だから精神的に疲れただけであつて、肉体的にはぜんぜん疲れていない。むしろ良い具合に体動かしたから、さっきより調子良いくらいだ。

で、出れたことには素直に喜びたいところだが、出た先がなんもないだだっ広い荒野と言うのはいささか味気がない。せめて街道やら沼地ならまだワクワクできたことだろう。魔物とか魔物とか魔物とか出てくるから・・・。

コ、コホン。

過ぎたことは気にしない。それが俺のポリシー。

ということ、早速この近くに村でも良いから人が住んでるところがないか探そうと思います。

さっき探査魔法使ったけど2km以内に人が集まってるところはなさそうだった。

なんで5kmじゃないかっていうのは、設定を間違えたからってことになっておいてくれ。

決して魔物たちのせいではない。そこだけはあしからず。

んじゃ、『飛行魔法』使って上空から探しますか。

「飛行 フライ！」

そういつた瞬間、俺の体から何かが抜けてすぐたまる感覚がする。

それと同時に (at the same time)、体が浮く感覚がする。

「お、おおお。う、浮いてるっ！」

いままで何回も『飛行魔法』を使ったけど、それはあくまでもゲームの中で。現実？で使ったのは初めてだ。つか、普通現実で使えねーよ。

俺は本当は呪文をつぶやかなくても魔法は発動する。無詠唱あるからな。でもなんか最初の魔法ぐらい、詠唱したほうが良いかな、って思ってたただけだ。別に他意はない。

探査魔法も魔法とつくからには魔法だが、あれは、魔法であつて魔法ではない。そう！断じて忘れていたわけではない！つか、探査魔法つかうときに呟くやつのはうがばあかだろ。まあ、マジシヤンのスキルを極めていないやつは呟かないといけないんだけどね。

おお、気づいたら結構高いところまで上がったな。たぶん、目測で500mはきたんじゃないか？うん、こりゃそんなくらいあるな。

「おお、おお、よく見えるぜ」

前方の遠いところ（12kmぐらい）に、大きな外壁がある町らしきものが1つ。そこに行くまでに小さい村らしきものが2つ（近いほうは2、3km遠いほうは6、7km）。

右は荒野、左も荒野。

後ろは森を抜けて、1、2kmところに村が1つと、そこからちょっと行ったところに街が1つ（5、6km）。

そしてすぐ下では、盗賊らしきものに馬車？が追いかけられている。

追いかけられている。

・・・追いかけてるっ!？

おいおいおい!

なんだこのテンプレ臭!

明らかにおかしいでしょ!これ!？

ああ、くそっ！

これはあれか？暗に助けろって言う神のお告げか？

・・・上等だぜ。やってヤローやないの！

「つく！」

いま私は賊に追いかけている。今私が捕まったら中にいるお嬢様は……っ！

私はラミア・スフィル。ラインハイド家筆頭メイド兼護衛だ。

ラインハイド家には多大な恩があるので、恩をあだで返すつもりは毛頭ない。

しかし、他の護衛のものはいま違うところで足止めしている。あのもの達も、並みの賊ではかなわないくらい強いから大丈夫だろ。

だが、いかせん、数が多過ぎた。

こちらの護衛は5人。

それに対して相手の数は50人ちょっと。

単純に考えてこちらの10倍はいる。

今、私を追ってきているのは10人ちょっと。他の40人はたぶん足止めしてくれているだろう。

20人はいないことがせめてもの救いか……。

「ラミリア……」

「っ！？お、お嬢様！い、いけません！中に隠れていてください！」

「で、でも……！」

「大丈夫です！お嬢様はたとえ私達がどうなろうと、必ず！旦那様の下にお送りします！」

そっだ。

私達がたとえどんなことになるうと、お嬢様だけは旦那様の下にお届けしなくてはいけない！

そう、たとえ死んだとしても。

「ひゃっはあ！姉ちゃんそろそろ諦めたらどうだ？」

「そうだけ姉ちゃん！おとなしくその中にいる嬢ちゃんを渡しな！」

「誰が貴様らみたいな下郎にお嬢様を渡すかつ！お嬢様には指一本触れせん！」

「っ！このアマ！おとなしくしてればいい気になりやがって！おい、てめえら！一気に攻めるぞ！」

『おおっ！』

つく！

ここまでか……。

だが私は最後まで諦めない！

そんなことを考えているうちに賊Aは私に剣を振り上げ

「おらぁっ！」

「っ！！」

私に向かって振り落とされた剣は容赦なく私の体を切り裂くはずだ

った。

そう、  
“はず”  
だった。

風の防壁  
フェーンブロッケ

賊Aの剣は何か見えない壁みたいなものに阻まれ、半ばから折れた。

「は？」

「え？」

私だけじゃなく賊Aも驚きのあまり固まっている。そんな中

「ふう、何とか間に合ったか？」

そんなどこか抜けたような、だが、優しい声が聞こえた。

出れたけど・・・これなんてテンプレ？（後書き）

英語を入れたのは

俺がいまテスト期間中で

ひとつでも熟語を覚えようと思ったから。

それとテンプレで。

護衛（前書き）

昨日の朝

同級生が死んだって電話来ました。

土曜日葬式行ってきます。

## 護衛

Side:ベルム

「ふう、何とか間に合ったか？」

やあ、今日も元気20%のベルムだ。

結構ギリギリのタイミングだったが、何とか防御魔法を発動することができた。一般的に、自分にしか使えないけど、『多重詠唱』を覚えたことによつてそこらへんが曖昧っつーかなくなった？のかな。

とにかく、目に見える範囲ならどこでも展開できるようになっていた。だから後ろから不意打ちとか、全方位集中砲火とかもできるよつになつた。はつきり言つてこれは反則だべ〜。

閑話休題

関係ない話はこちら辺でやめて。

「大丈夫か？」

「え！？あつ、はい」

目立った外傷もないし（つーか無傷）、どうやら間に合ったみたいだ。

これで間に合いませんでした、とかだったら寝覚めが悪いからな。つか、こんなきれいな人に怪我負わせたらたぶん一生後悔するわ。んで、賊は地獄行きと。

「な、なんだ兄ちゃん?!どっからきやがった!?!」

「どっからって・・・」

そうやって俺は上を指しながら

「空」

「空あ?」

なんか、きれいな人も賊もこっちを見て固まっているがどうかしたのだろうか?あくまで推測だが、この世界は『過去の遺産 英雄に受け継がれるもの』とほぼ同じだと見ていいだろう。だとしたら、飛行魔法ぐらい日常的に使われているはずなんだが・・・。

「っははははあ！冗談きついぜ兄ちゃん！」

「空飛ぶやつなんて見たことも聞いたこともネーぜ？」

「頭でも打ったか？」

「確かに見たことはありませんが・・・」

・・・え？

も、もしかして俺ってイタイ子に見られてる？

・・・つかなんかこいつらムカつくからもう殺っちゃっていいよね？

Side：ラミリア

「ふう、何とか間に合ったか？」

その声とともに私の前に黒髪黒目黒服の青年が現れた。一瞬その異様に目を奪われた。

だが同時に、黒髪黒目に疑問を持った。

この世界で一番多い髪の色が金。次に赤。

黒髪などほとんどいない。

私の知っている人で言えば、私の仕えている家、つまりリンハイド家は黒髪だ。

どつちら初代が黒目黒髪だったらしく、その血が濃く出ているのだと思う。

しかしこの青年、よく見なくても結構な美形である。優しいと言っより、鋭いと言っほうの美形だが。

そんなことを考えていたら

「大丈夫か？」

「え！？あつ、はい」

いきなり声をかけてきたので、びっくりしてしまったが、何とか答えることができた。

こゝ、声もなかなかいい……。

……っは！

危ない危ない。

つい、いい声だったので、ちょっと自分の世界に入ってしまった。

つとと。

今はそんなことより

「な、なんだ兄ちゃん?!どっからきやがった!?!」

そう、私もそれを聞きたかった。先を越されてしまったのはいささか癪だ。

・・・よし、この賊殺そう。

・・・っは！

また自分の世界に入ってしまった。しかもなんか思考が危ないほうにいきかけた。

そんなことを一人でやっているうちに話は進み

「どっからって・・・」

そう言って彼は

「空」

と言いながら人差し指を立てた。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

「空あ？」

そう、彼ははっきり『空』から来たといった。

そんなことを言う人は神か、頭がおかしい人だろう。

だが彼は、見た目どこかがおかしいわけでもない。むしろ良い。

かといつて神々しくも・・・ある・・・？

あ、あれ？後光が見える？

私は目をこする。

あれ？見えなくなった。気のせいかな？

またまたそんなことを考えているうちに話は進み

「っははははあ！冗談きついで兄ちゃん！」

「空飛ぶやつなんて見たことも聞いたこともネーぜ？」

「頭でも打ったか？」

そついい、賊達は大声を上げて笑い出した。

「確かに見たことはありませんが・・・」

そう見たことはない。だが、聞いたことはある。

ラインハイド家の古い文献（と言っても1000年ぐらい前）のなかに、かつて人類は自由自在に空を飛びまわり、世界最強種である『魔龍』と対等に戦ったとか何とか。

ただ、その後すぐ魔物の大侵略があり、英雄と呼ばれた人たちは次々に死んでいったらしい。

ラインハイド家はその中で生き残った一人らしい。

その後、この国【ラインハイド】の復興に一番貢献し、国王から感謝の印として【大公】をもらったらしい。

初代は、その前から国に数多くの武器や防具を納品しており、かねてから爵位を与えようと国王並び重鎮の人たちは思っていたらしい。

だから、ラインハイドは実質No.2の権力を握っている。

#### 閑話休題

だから、もしかしたらこの人もどこかの英雄の子孫かもしれない。

そんなことを思いながら彼を見てみると

彼は、賊に向かって銃みたいなもの構えていた。

護衛（後書き）

同級生死ぬって

なんか実感わかないね。

やりすぎた(前書き)

やっちゃったぜ

やりすぎた

Side:ベルム

俺は、賊に向かって銃みたいなものを買っていた。

ん？

何で銃を買っているかって？

ムカついたからだけど。

え？

職業に銃士なかっただろってか？

ああ、そついえば言ってなかったな。

職業によって、使う武器というのが決まる。これはゲームなら当然の機能だ。だが、このゲームではあくまで使う武器が決まるだけで、その武器だけしか使えないということはない。逆にどんな職業だったとしても、どんな武器でも使える。

たとえばアーチャー。これは基本弓というより、弓や短剣しか使わない。これは普通のゲームなら常識だと思う。だが、このゲームでは普通に大剣とか銃とか杖とか使える。つまり、本来後衛の職業なのに、バリバリ前衛で戦えるってことだ。

まあ、つつてもスキル使えないし熟練度もあがりにくいので、そんなことするのはよっぽどアホか完璧主義者ぐらいだろうな。俺はどちらかって言うと前者だな。ある意味ネタ的な感じで使ってるからな。でも、攻撃力とか桁違いに高いから、本職の人にたまに間違えられる。

L V M A X に熟練度もいつのまにかすべて M A X。おまけに、創造者になったことによりスキルまで創れるようになった結果、本職顔負けの完全無欠の反則級プレイヤーになってしまったわけだ。

で、何でいま俺が銃を構えているかというと

ただ単に、離れている敵のそばまで行って倒すのがめんどくさかっただけだ。

剣とかだったらスキル使えばいけるかもだけど、めんどくさい。

手甲もスキル使えばいけるけど、つけるのめんどい。

弓だったら近く遠距離どこでもいけるけど、弦引くのめんどい。

マジシャンだったら魔法で一気に殲滅できるけど、今は迂闊に魔法が使えそうにないので却下。

残るは鎌か槍か銃。

つか、ぶっちゃけ気分的にも銃使いたかったから出した。

おk？

と言っことで早速

「死にたくなかったら

「じっちゃ「じっちゃうるせーな！」「・・・」

今話し始めたばかりなのに「じっちゃ「じっちゃうるせー」とか・・・。

つか、人話している途中に割り込んできやがって。

このや パーン るっ？

バタッ

『……………』

「……………テヘッ やっちゃったんだぜ」

『……………』

ひゅゝるるるるるる

……………だ、大丈夫だモチツケ俺。

……………あ。

お、落ち着け俺。

たぶん皆いきなりのことには驚いて固まっているだけであって決してなんかさつきから冷たい視線を感じるな〜とか思っていないんだからなっ！ホントだよ！

……………お、俺をそんな目で見るなああああああ！！

パンパンパン　　ドガン！

『ウぎゃあああああああああああああ』

あ、ついスキル『囷爆撃』使ってしまった。

スキル『囷爆撃』

『囷爆撃』とは、ベルムが考えた新しい銃士系スキル。3回目までは普通に発砲し（当たらなくてもいい）、最後に気力とか魔力とかとにかく何でもいいから『力』を籠めて発砲する（囷を発砲しているうちに力をためる。それと複数の『力』を同時に籠めることも可能）。『力』がほぼ無制限にあるベルムがこれをやったら、たぶん防壁とかマジ紙のように突破できる。さらにベルムの武器は基本+3以上なので、武器の性能もこの効果に足されて大変なことになる。今回はランクが一番下の『ベリアル』の霊銃+3』を使ったので武器の性能はあまり追加されていない。

まあ、今回はあんまり『力』を籠め過ぎると、馬車にも被害が及ぶから程々にしたけど（でも、前方10mぐらい地面が抉れる）。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
やりすぎた？

やりすぎた(後書き)

み、短い・・・。

誤解で攻撃されるってのもテンプレだよな(前書き)

タイトルがもう内容いってんじゃない。

誤解で攻撃されるってのもテンプレだよな

Side…ラミリア

『……………』

「……………テヘツ やっちゃったんだぜ」

『……………』

そうそれからは一瞬だった。

いきなり頭を抱えたと思ったら、こつちをみて涙目になり、銃を乱射した。

パンパンパン ドガン！

『ウぎゃ ああああああああああああ』

軽快な音を立てて発砲された弾丸は、最後だけ明らかに音が違って

た。

最初から3発は

ヒュッ

という音だったけど、最後の1発は

ゴオオオツツツ!!!

という明らかにその銃から聞こえるはずがない音がした。

その後私達にもものすごい土煙が襲い掛かってきた。

その土煙がようやくはれて、賊達がいた方向を見てみると

「これは・・・」

賊たちは半分以上が吹っ飛び、生きていても片腕がなくなっていたり、見ただけでも重傷というのがわかる。

私達は無傷というなんとまあ奇妙な結果になった。

「うあう・・・」

「い、いてえ・・・いてえよ・・・」

「た、たすけて、かあちゃん・・・」

あまりにもひどい状況に、やりすぎだと思ったが、彼は

「それが今までお前たちが与えてきた痛みだ。痛みは人を変え、負の感情を生み出す。お前たちは被害者じゃない。犯罪者だ。故に、このくらいのこと当たり前と思え」

彼の言葉を聴いて、こいつらが今何をしようとしていたか、今までどんなことをしてきたのか思い出すことができた。

少しでも同情してしまった自分を殴ってやりたい。

そうだ、こいつらはやっっちゃいけないことをやっている。だからこ  
うなっても仕方がない。

そう思ったら、自然とこの状況を受け入れることができた。

そして彼は、ここう続けた。

「貴様らは痛みを知った。だが、一度犯した罪を拭えるわけではない。ここでお前らの命を絶つことは容易くできる。だが、それでは罪は拭えない。だから、貴様らは今まで自分がしたことを悔いながら生きてゆけ」

そういった後、賊達は気絶し、体が白い光に包まれていった。

白い光がはれると、賊達の怪我は嘘だったかのように消えていた。

そしてこの現象を起こしたのは、たぶん彼だろうと、同時に思った。

いっただい彼は何者だろうか？

Side:ベルム

「貴様らは痛みを知った。だが、一度犯した罪を拭えるわけではない。ここでお前らの命を絶つことは容易くできる。だが、それでは罪は拭えない。だから、貴様らは今まで自分がしたことを悔いながら生きてゆけ」

いや、こんなこと言っちゃったけどこれ俺のキャラじゃないんだよね。

なんかその場のノリで言ってみたっていうか、言わなきゃって変な衝動に駆られたっていうか。

まあ、要するに『やっちゃったぜ』って感じだ。

とりあえず生きろって言った手前、このままだったら出血多量で死んでしまう。

とついでに、とりあえず治癒スキル『オールヒール』を賊達にかける。

スキル『オールヒール』

『オールヒール』とはその名のとおり、対象の傷を、死んでいない限り完璧に治すスキルである。それに、対象は複数でも治すことが可能なので、ヒーラーには欠かせないスキルである。だが、その分一回の使用でスキルレベルでもMPが770もっていかれるので、ちゃんと計算して使わないとすぐガス欠になってしまう。

閑話休題

ふう〜。

これでとりあえず大丈夫だろう。

じゃあ、後はこいつらを馬車にくくりつけて

「あ、お嬢さんこいつら馬車に」

「貴様！ラミリアさんから離れるおおおおお！……」

「・

ガンッ！

うん、なんか誰かこっちに向かってくるな、ってのはわかったよ？  
それなりに強そーな気配だったから、この人の仲間かな、と思って別段気にしてなかったけどまさか切りかかってくるとは思わなかった。

これなんてテンプレ、と思いつつながらあの人の顔を見ると

サササッー

おおっ！？

真っ青でございませす！

あんなに真っ青になった顔、17年生きてきたけど初めて見た。

そんなことを考えていると

「貴様〜！ラミアさんに手を出そうとはいいどk y」ガンっ！  
いっつ〜！」

「こ、こら！レイル！な、なんてことするんですか！」

「え、ええっ？えっと、俺はラミアさんを襲おうとしていたあいつを倒そうと思って」

「その人は襲おうとしたんじゃないで、賊から私達を救ってくれたんです！！」

「え、ええ！ほ、本当ですか？」

そう言って、レイルと呼ばれていた少年は俺に聞いてくる。

「ん？まあ、助けたな」

「っ！？も、申し訳ありませんでした！」

そう言って、レイルは土下座した。

・・・土下座した!?

俺はとりあえずレイルに近づき

「あ、ああ、いや、そこまでしなくて」貴様!弟から離れるおおお  
おおお!」・・・」

・  
・  
・  
・  
・  
もう泣いてもいいよね？

誤解で攻撃されるってのもテンプレだよな (後書き)

ふう

今日の葬式少しづると来た。

誤解が解けて（前書き）

ねむーい・・・。

評価300pt突破！

お気に入り100件突破！

やったね・・・ねむい。

## 誤解が解けて

Side:ベルム

「先ほどは本当に申し訳ありませんでした」

「ごめんなさい」

「迷惑をかけたな。すまなかった」

「ああ、いいよ。そんな気にしてないし・・・」

「ああ、なんだかすつごく疲れたベルムだ。」

あの後、無事(?)誤解も解け、彼女達は謝罪をしてきた。俺自身は特に怪我したわけでもないのに、何回も謝られると逆にこちらが申し訳なくなる。俺は生粋の日本人だ。たぶん、日本人ならわかってくれるだろう。

まあ、そんなことは置いといて。

「君達はなんでその賊に襲われていたんだ？」

「・・・それは」

「たぶん私の所為です」

そう言つて馬車から一人の少女（つっても見た目16、7歳だけどね）が出てきた。

「君の所為？」

それつてどーゆーこと？という意味を籠めた目でその少女を見る。

「私はこの国の大公の娘です。それでたぶん私を捕まえて、身代金でも要求しようとしたのでしょ？」

『大公』

爵位の最高位に値する貴族。各国に1家だけ存在する。その後、公爵・侯爵・伯爵という風につづく。実質国のNo.2。

## 閑話休題

おおっ。

まさかの大公の娘か。

俺もゲーム内では、大公の爵位持っていたけど、結構大変だった。

なんてったって、国のNo.2だ。

国で起こった良いこと悪いことの後始末をしなきゃいけない!

普通の雑用やらなんやらは、使用人や奴隷にやらせたり、気が向いたら自分でやっていた。

主にパトロールをかねたゴミ拾いとか。

おかげで近隣の国には、自国が清潔だと、それは大公家のおかげだともっぱらのうわさだ。

そしてそんな大公家にも、3つの教訓があった。

1つ目！

『働かざるもの、食うべからず。つか死ねっ！』

これはそのなのとおり、働かないものにやる食い物はねーよ、つてことだ。つか、そんなやつ死んでしまえ、つてのも忘れちゃダメだ。これは使用人や奴隷だけでなく、俺たちの家系にも言えたことで、俺たちも仕事をサボるとこの家訓の対象になる。まあ、家に働かないアホはいなかったから誰も対象にされなかったけどな。

2つ目！

『奴隷も人であり、たとえそれがどんな人であろうともなかるうとも、相手を尊重する！』

これは、たとえ雇った奴隷の姿かたちが醜くとも、人じゃなく亜人や獣人であっても相手の尊厳を損ない行動はしない！、ってことだ。奴隷だからといって馬鹿にするのではなく、たとえどんなやつでも敬え。この家に雇われたら、もうこの家の家族も同然。これは奴隷だけでなく使用人にも言えることで、皆家族説といわれている。

3つ目！

『仲間のピンチには、たとえどんな状況だろうと助けにいけ！』

これもそのなのとおり、自分がいかに絶体絶命満身創痍気絶寸前だとしても、仲間が危ないときは助ける、ってことだ。逆に、仲間を見捨てるクソヤローは家にはいらぬ、ってこと。2つ目の皆家族説と同じで、仲間も家族同然。助けるために力を惜しむな。たとえ最善の策が思い浮かばなくても、自分と仲間が助かる方法を全力で考えること。仲間を助けて、自分が死んだら元も子もないからね。

まあ、大抵の貴族は家の家訓を聞いたら『は？何いつてんのこいつ？』的な目で見る。けど、この国の全ての家の家訓は、俺の家の家訓に感化されたのか、大体同じようなものだ。他の国の一部ではあるが、結構上の貴族も大体こんな感じだった。

閑話休題

「へえ、大名家の娘さんか・・・」

「はい。最近魔物が活性化していると各国での報告であったので、その調査をしていた帰りです」

「魔物が活性化・・・もしかして魔王の所為か？」

「っ!?!?・・・なぜそう思われますか？」

「なに、ちょっとした昔話を思い出してな。その状況が似ていただけだ」

そう昔話。あの森が俺がゲームの中で見たときより、数倍でかくなっていたことを見ると、ここはたぶん俺がゲームをしていた世界よりも遙か未来であることが予想される。大体の形は同じだったが、いくらなんでもあの森を抜けるのに時間がかかり過ぎていた。それに、上から見たときもなんかでつかかったしな。

んで昔話ってのは、俺がやってたあのゲームのこと。詳しく言う  
と

開始3ヶ月で魔王が出現。

魔物が活性化。ついでに国に侵攻してきた。

経験値がなんか倍になった。

L V U Pすぐでうはうは。

でも、初心者にはきつい。

だから誰か魔王を倒してクエスト発動。

でも、魔王のところに行くまでの敵強過ぎていけない。

そこで俺登場！

仕方ないからいくか、って気分で出陣。

魔王のところまで難なく到着。

なんか笑い方ムカついたから、最上級魔法連続でぶっ放す。

魔王1カ月で討伐完了。

俺勇者、侵攻防いだやつ皆英雄。

やったね貴族になれたZ E !

ってな感じ。

つか、ぶっちゃけ魔物の活性化とか、テンプレで魔王の所為以外ありえない。

ってことで言ってみたらどうやらブンゴ。

「てな感じだ」

「は、はぁ？何を言ってるんですか？」

「おっと、すまん。こっちの話だ」

「はぁ……。まあ、そのとおりです。原因はたぶんですが魔王です」

ふむ。

ってーことはだ。

またあいつを倒しにいけばいいのかな？

まあ、面倒だけどいつか行くか。

そんなことより今は

「とじろでいつの間にか加わっている、そこのお二人はどちらさん

で?」

『えっ!?!?』

「おお、やっと気づいてくれた」

「まったく、皆無視するなんてひどいです」

「ユーナにデイン!」

どうやらこの人たちも仲間らしい。いきなり攻撃してこないところを見ると、最初の二人よりは幾分冷静なようだ。

「・・・あ」

「?どづかしましたか?」

ここで重要なことに気がついた。

「そついえばち・・・自己紹介してなかったな」

『・・・あ』

「え？なに？」

「またバカやったの？お姉ちゃん達」

・  
・  
・俺もそのバカにふくまれんのかな？

誤解が解けて（後書き）

なんか・・・日本語がおかしい

つか文脈がおかしくなった。

たぶん途中で寝たからだなWW

自己紹介・・・やっとか(前書き)

やっとな自己紹介・・・

あ、曾ばあちゃん死んだって電話きました

最近物騒です。

私も死ぬかも。

自己紹介・・・やっとか

Side:ベルム

「あー、じゃあ、まずは俺からだな」

やあ、前回馬鹿疑惑がついてしまったベルムだ。

・・・俺は決して馬鹿ではない！

アホなだけだ！

ここは譲れない！

と、まあ、冗談はさておき。

早速自己紹介に入りたいと思います。

「俺の名前は・・・ベルムだ。一応冒険者をやっている」

「ベルムさんですね」

「ベルム・・・」

「うん？どこかで聞いたことあるよっな？」

「僕も聞いたことあるよっな・・・」

ん？皆どうしたんだ？

なんか何かを思い出そうとしてるっぽいけど（一人を除いて）。

「ちなみにファミリィネームとかはないのか？」

「ん？ああ、まあ、“R”とだけ言っておこうかな」

「“R”？」

まあ、たぶんここが未来だとしたら、俺のファミリィネーム知っている人がいるだろうからな。迂闊には名乗らないほうが良いだろう。一応大公だったし。過去に魔王倒したし。

「じゃあ、次はそちらで」

「あ、はい。そうですね」

そう言っつて、馬車の御者をしていた人が自己紹介を始めた。

「私はラミリア・スフィルです。リンハイド家筆頭メイド兼護衛をしています」

「ん？リンハイド……だと……？」

「はい？……あっ」

「あっちゃー」

「たまにやらかすよね、ラミリアさんって」

リンハイド家。

なぜ俺がこの名前に反応したか。

それは

俺のフルネームが『ベルム・ダ・エル・リンハイド』だからだ。

そうか、まさかこんなところに繋がりがあんなんでな。さすがの俺でも、予想外過ぎて2秒くらい思考が停止してしまった。

これはもう偶然って言うか運命だよな。

とか思っちゃってる俺はアホオだな。

偶然だよな偶然。

うん俺は気にしない。気にしない。ハゲルゾ。

「うん、まあ、それはもう良いとして。次いってみよー」

「良いんですか!？」

「まあ、本人が言ってるから良いんじゃない？」

「そっだぜ」

うん、早くして欲しいなー。じゃないと俺が冷静じゃなくなっちゃ  
う。

「じゃあ、次は私が」

そう言って次は馬車から出てきたお嬢サマが自己紹介を始めた。

「私はミラネス・ア・エル・リインハイドです」

「ああ、大公の娘さんね」

「え、ええ、まあそうですけど・・・」

『・・・・・・・・』

気にしない気にしない。俺も大公だけど気にしない。

「えっと、僕の名前はレイル・マービルっています」

「ああ、突撃っ子ね」

「うっ」

「・・・コホン。私はサラ・マービルだ」

「こっちはブラコン」

「ブラコン??」

「いや、なんでもない」

どうやらこっちにブラコンという言葉はないようだ。まあ、どうでもいいことだけだ。

「ユーナはユーナ・マービルだよ。ユーナちゃんって気軽に読んでね。」

「わかった。よろしく、ユーナちゃん。」

「あはっ。よろしくね、お兄さん?」

「お兄さん……悪くないな。」

なかなか元気がよろしいようで……結構可愛いかも。しかもお兄さんって……いいよね。

「俺はデイン・マービルだ。一応この中では最年長だ。」

「へえ……4人ともファミリーネームがマービルだけどさ、もしかして兄弟とか?」

「ああ、一応俺が長男で、一番上だ。」

「僕が次男で、一番したです。」

「私は長女だ。」

「次女です。」

ふむ。

どうやら デイル>サラ>ユーナ>レイル の順番らしい。

「ちなみに歳は？」

「私は17ですよ」

「私は16です」

「俺は19だ」

「私は17だ」

「私は16だよ」

「僕は15です」

ほうほう。

どうやら デイル>ラミア=サラ>ミラネス=ユーナ>レイル  
の順番らしい。

まあ、大体予想はついていたけどね。

「ちなみにベルムさんは何歳ですか？」

「ん？俺か？おれは17だ」

『・・・えっ？』

・・・何だお前らその反応。

泣くぞコラ。

自己紹介・・・やっとか(後書き)

金曜日葬式いつてきマフ。

とりあえず(前書き)

拝みにいってたら遅れました

とじあえず

Side:ベルム

「お前らなんだその反応」

歳言った瞬間

『嘘だろ?』

という視線を向けられたベルムだ。

「いや」

「だって」

「ねえ・・・」

「うむ」

「絶対20歳超えてると思ったし」

どうやら俺は20歳超えてるように見えるらしい。・・・マジでか。初耳なんですけど。

「・・・そんなに老けて見えるか？」

「え？」

「いやいやいやー！」

「カツコイイからそう思ったただけですよ」

「確かにレイルやデインと違ってカツコイイな」

・・・カツコイイと言われていやな気はしないが、そんなこと言われたことないし、はっきり言っただけ俺はフツメンだと思う。どこにでもいる平凡な高校生。それが俺の自分自身についての評価。友達からはなぜか『お前って結構鈍感だよな』とか言われて、よくため息つかれる。・・・なんでだ？

## 閑話休題

「お世辞でもありがとう」

「いやいや」

「本当のことですか？」

「またまたご謙遜を」

「・・・その言葉は人によって殺意を抱かれるから気をつけたほうがいい」

殺意とか・・・。また物騒な。

ちよと『親の仇』的な視線を送られることはあるが、さすがに殺意を向けられたことはないな。

まあ、それも1、2回ぐらいだし結構皆、友好的だったな。

なんか男子より女子のほうが友好的に接してきてくれたのは謎だけだ。

何で俺と話すと、どもるのかいまだにわかんない。

女子って不思議だなー。

不思議っていえば乙女心ってやつも不思議だよな。

もう、俺には一理解できないと思う。

つか、理解できる男とかもう男じゃないだろ。

あれだよあれ。

『残念なイケメン』が『それはもうイケメンって言わなくね?』と  
思うのと一緒にだ。

・・・ちがうか。

「とじろでちゅ〜」

「ん?」

また、くだらないことを考え始めていたら、ユーナが話しかけてき  
た。

「ここに来た時から思ったことなんですけどお〜」

「なんだ？」

「何か問題でも？」

「どうやら俺らに質問があるらしい。……できれば、俺に関係ないことがいいな。」

「この大きな溝って……なに？どうやってたらいこうなるの？」

「……」

「あ、たしかに」

「誰がやったんだろうか？」

「はい犯人俺ー！つか、もろ俺に関係ある。やったの俺だし。」

「それにそこに転がってるのって……“賊”だよな？」

『……あ、本当だ』

「そういえば忘れてた」

「やっべ。レイルに攻撃されてからそのまんま放置してた。てか、今まで存在自体忘れてた。」

ああ。これって説明したほうがいいのかな？

「ああ、ちょっといいか？」

「はい？なんででしょうか？」

「ん？まあ、かまわない」

とりあえず、ユーナの疑問に答えることにした。

「まずこの溝についてだが」

「うんうん」

「やったの・・・ぶつちやけ俺だわ」

『・・・えっ？』

「ああ、そうでした！」

ラミリアはなんか思い出したように、その他のは『嘘・・・だろ・・・？』的な視線を向けてくる。

「まあ、ホントだ」

「えっ、じゃあどつやってやったの？」

「あゝ、こいつで？こつ、バーンと？」

そう言つて『ベリアル<sup>の</sup>霊銃+3』を腰のベルトから抜く。

まあ、+3程度なので『あまり価値は高くないだろう』と思つて皆の前に出した。

みんな珍しいものでも見たように、銃を見てきた。

「へえゝきれいな銃ですね」

「なかなか凝つた意匠ですね」

「こんなにきれいなものは見たことありません」

「保存状態も良いようだな」

「ほえゝきれゝい」

ただ一人を除いて。

「……ベルム殿」

「ん？どうした？」

「その銃、少し見せてもらえますか？」

そうサラが言ってきた。

「え？・・・まあ、いいけど」

別にそんな貴重なものでもないし、壊れたり盗まれたりしても、もっと良いものあるしね。

「これは・・・」

「どうかしたんですか？姉さん」

「その銃になんかあるの？」

サラは銃を手を取った瞬間、いろんな角度から銃を見て、驚きの声をあげた。

何してるんだろ？

「ああ、ベルムさん。サラは生まれつき武器・防具やアイテムの『等級』を見ることができるようですよ」

「『等級』？」

「ええ」

その『等級』がいったい何なのかは解らないが、どうやらすごい能力らしい。雰囲気的に。

「で？どうだった？サラ」

デイルが待ちきれずサラに声をかけた。

「この銃・・・レジェンド級で、しかもRANK3だ」

『!?!?!?!?』

サラがデイルの問いに答えた瞬間、皆が驚きの表情をしたまま固まった。

いったい何があったんだ？

とりあえず（後書き）

ねむい

帰ってきたのが11時。

目がシバシバする。

まさか俺が造ったものがこんなことになってるなんて・・・(前書き)

いつの間にか総合評価が400こえてた。

びっくり。

まさか俺が造ったものがこんなことになってるなんて・・・

Side:ベルム

「ええつと、ちょっといいか？」

『・・・・・・・・』

問いかけに誰も答えてくれなくて少し凹んだベルムだ。

「・・・・・・・・皆揃ってひどいやい。」

「・・・・・・・・もついいか？」

「・・・・・・・・ハッ！」

「あ、すみません」

「ちょっと驚き過ぎて」

「・・・・・・・・むむ」

「この武器がそんなにすごいものだと思わなかったなあ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

どつちやら皆驚いて少しの間思考が停止してただけだそうだ。

・・・無視してたんじゃないんだ。

よかった。

「ところで、その『等級』ってのはなんだ？」

『えっ？』

え？

なにその『そんなことも知らないの？』的な視線。

この状況で『知りませんけど何か問題でも？』っていいなくなるのは俺だけじゃないはず。

・・・そう思いたい。

つか、そうであって欲しい。

じゃないと俺が痛い子みたいになってしまう。

『何言ってるのこいつ』的なね。

## 閑話休題

「ええつと」

その後、ラミリアから『等級』について詳しく聞いた。まあ要らない部分を省いて説明すると、『等級』というものは、武器・防具やアイテムがどのくらい強力なのかをあらわすために用いる言葉らしい。『等級』の種類は、『一般級』・『特別級』・『伝説級』・『究極級』・『神具級』の5つあるらしい。それで、その『等級』の中にもランクがあるらしく、最低がRANK1で、最高がRANK3らしい。RANK1が1つのステータス＋、RANK2が2つのステータス＋、RANK3が2つのステータス＋と特殊効果が1つとなるらしい。ただ、一般級にだけRANK0があるらし

く、一般的な兵士は普通これを使っているらしい。

『ノーマルクラス  
一般級』

武器・防具でどれかのステータスが+1〜5相当のものをさす。  
特殊効果として『速撃』や『連歩』、『我慢』などの下級効果があるらしい。

『スペシャルクラス  
特別級』

武器・防具でどれかのステータスが+6〜35相当のものをさす。  
特殊効果として各『精霊の加護』や『鉄壁』、『連撃』などの中級効果があるらしい。

『レジェンドクラス  
伝説級』

武器・防具でどれかのステータスが+36〜1000相当のものをさす。特殊効果として各『武具神の加護』や『滑空』、『吸収』な

どの上級効果があるらしい。

『アルティマクラス  
究極級』

武器・防具でどれかのステータスが+101〜255相当のものをさす。特殊効果として各『精霊王の加護』や『武神の加護』、『千里眼』などの最上級効果があるらしい。

『ゴッドアイテムクラス  
神具級』

武器・防具でどれかのステータスが+256以上のものをさす。特殊効果は、いままで『神具級』の武器や防具が、2つほどしかなかったらしく、その2つがどちらもRANK1だったことからわかっていない。

大体こんな感じだ。

『ベリアル<sup>の</sup>霊銃+3』は腕力+42、運+55、特殊効果『狙い撃ち』がついてる。

・・・？

待てよ？

ってことは何か？

俺がつけてる防具とかアイテムって、ほとんどが『伝説級』や『究極級』ってことか？

・  
・  
・  
・  
・  
あ、  
あぶねー！

『外部特殊干涉遮断』っていう特殊効果があるマントを羽織ってたよかった。

これは、その名のとおり、誰かが俺の防具とかを勝手に鑑定とか悪戯しないようにするためにつけた特殊効果だ。

これなかったら今頃もっとメンドクサイことになってたかもしれないな。

## 閑話休題

「へえ〜。ってことは俺のこの銃はそれなりにすごいのか？」

「それなりに、どころじゃありませんよ!？」

「『伝説級』ってだけで、確実に国宝級の武器ですよ!？」

「しかも、RANK3!?!」

「もう、すごいとしか言いようがないよお〜」

「うむ」

「.....」

.....じゃあ、俺がいままで国に納めていたやつは全部『特別級』

になるわけか。

なるほど。

道理で俺の好感度が上がりまくるわけだ。

俺の所属していた国は珍しく、汚い貴族が少なかった。

まあ、その少ない貴族のほうも俺が直々に制裁してやったが。

それは、まずほつといて。

さっきからサラが無言なのがなんか怖い。

とりあえず声をかけてみるかな？

よしそう決まら「ちよつといいか？」

「へ？」

あ、やべ。

ついへんな声だしてしまった。

幸い皆の興味は銃に向いていたらしく、サラ以外に聞かれることはなかったようだ。

「……コホン。で、どうした？サラ」

「ああ。……この銃はどこで手に入れた？」

「……ああ。」

なるほど。

まず間違いなく『国宝級』になる武器をなせたかが『冒険者』が持っているのか、ってことね。

うん。

正直に俺が造ったって言ってもいいけど、そうすると引当りなくなるよな。

でも、なんかこいつらには嘘をつきたくないしなあ。

ううん。

どうでしょうか……。

・・・よし！

決めた！

「あゝ、皆ちよつと良いか？」

「はい？」

「なんでしょうか？」

「どうしたんですか？」

「どうかしたか？」

「ん？いいよ」

「ああ」

俺の呼びかけにこたえてくれる皆。

俺は冷静に、そう、極めて冷静に皆に話す。

「俺はいまから重要なことを話す。そのことを誰にも言わないと約束してくれ」

「っっ」

「べつにいいですけどっ」

「他の皆はどうだ」

「」「」「いい（ぞ／＼ですよ）」「」「」

「っっ」

「ああ、その武器についてだが・・・」

『・・・ゴクッ』

「ぶっちゃけ俺が造ったんだわ」

『・・・は？』

・・・やっぱり信じてくれないよな。

まさか俺が造ったものがこんなことになってるなんて・・・(後書き)

火葬に行ってきたけど

髑髏むくろがほとんどなかった。

びっくりした。

よこまの行(つ) (前書き)

し、しぬ

頭がいたず。

## よじまん行いっ

Side:ベルム

『……………』

なんか前回も似たような始まり方をしたような気がするベルムだ。

確か前は、俺の持っているこの銃が『伝説級』のRANK3だったってことで、皆固まっていたな。

そういえばさ。

なぐんか俺忘れてる気がするんだよな。

なんだっけか？

うん。

ううん。

あ……………。



あ。

思い出した。

そういえば、またあの“賊”を放置したまんま話し込んでしまった。

あいつらは……相変わらず馬車近くに地面で気絶してやがるぜ。

まあ、あんだけの攻撃食らったんだから、無理もないか。

起きたとき大変だろーな。

主にあいつらの精神が。

そんなことを思いながら、とりあえず“賊”に近寄って

「・・・なあ、そろそろ行かないか？」

『・・・』

・・・まだ無理っぽい。

1時間後

「本当に何度も何度もすみません」

「あまりにもおかしなことだったので」

「うむ・・・たしかにな」

「もうっ！冗談でもイっていいことと悪いことがあるんだよ！」

「いや、ホントのことなんだが？」

『・・・』

おい、またか。

いや今回はさすがに待ちきれん。

そこまで俺は磊落な性格ではないからね。

っど、いっことど

「はあ・・・『神経落雷』」

『つつっ！！！？！？』

『神経落雷』ってのは、ぶっちやけ攻撃した後の硬直をなくして、体力と魔力が続く限り攻撃し続けるために生み出した技だ。今回は、

硬直をとくためにやった。まあ、少々ベリッとするがな。

「な、なにするんですか!」

「び、びっくりした」

「うっっ、ちょっとイかった」

「まあ、自業自得ってところだ。再び思考を停止させたお前らが悪い」  
『うっっ』

まあ、もともとの原因は俺なんだけどね。

どうでもいいけど。

「んじゃ、とりあえず“こいつら”を衛兵に渡したいから、町にい  
こーぜ」

「あ、そういえばいたんでしたね」

「ああ、忘れてた!」

「あははっ……」

「と、とりあえず行くか」

どろちから忘れていたのは俺だけじゃないようだ。

・・・よかった。

馬車移動中

やっと馬車に乗って、今ここから一番近い街『ラインハルト』にむかっている。

『ラインハルト』はこの国『デインハイド』の首都『リインハイド』の次に大きな町らしい。

なんでも商業が盛んな都市らしい。

それに、大陸でも5つしかない魔法学園があるらしい。

この大陸には3つの国があり、その首都にそれぞれひとつずつあるらしい。

まあ、国の名前はまた後で話す。首都も。

んで、その『ラインハルト』はそれぞれの国の国境の一番近いところにある。

つっても、30km以上離れてるから近いのかはいまいちわからないが。

で、幸いさつき俺が上空で見た街の1つが『ラインハルト』らしい。

『ラインハルト』まで後10kmぐらいだと思う。

まあ、こんな無駄話をしたのは、あれだ。あれだよ

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

そう！

さつきから馬車の中で会話という会話がないんだよ！

つか、俺以外全員女性だし、何はなしていいか分からない。

デインは、じゃんけんで負けて御者に。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』





・・・はあ。

オレにやんこくある？

よしまし行(り) (後書き)

短い

笑顔（前書き）

葬式

1週間置きにやってみるぜ。

笑顔

Side:ベルム

『……………』

相変わらずな空気にどつていいか分からないベルムだ。

いや、マジで。

もうこの空気無理。

マジ勘弁。

俺にこの空気はきつ過ぎる。

あんな口調だが本来俺はもっとおちゃらけて……………るのかなあ。

まあ、面白いことに生きがいを感じているから、結構ちゃらいのかな？

まあ、そんなことはいいとして。

この空気を何とかさすべく誰かに助けをもと

ミラネス：窓から外眺め

ラミリア：ぼへえ

サラ：思案顔ですが何か？

ユーナ：お昼寝中だよ！起こさないでね

デイン：御者でござる

レイル：上に同じでおJAL



「な・ん・だ？」ゴゴゴゴオオオ

「……………あ、ああ」

だつていきなり話しかけられたから敬語になつてもしょうがないじやん。

しかも今まで誰も話しかけてくれないしさ。

ついでに、テンションもちょっと上がったけどね。

つか、サラさんよ。

何か震えていませんか？

え？気のせい？

だよー。何か手が小刻みに震えてる気がするけど気のせいだよー。  
！。

ミラネスとラミリアとかも震えてる気がするけど気のせい。

そうすべては気のせいなのさ！

閑話休題

「で？話しかけたってことは俺に何か用があるんだよね？」

「あ、ああ」

「じゃあ、遠慮せずに言ってみろ」

そういたとたんサラは真剣な表情になり、

「あの銃は……」

「ん？」

「ベルム殿が造ったので間違いはないんだよね？」

「ああ、そうだが」

「ということは、材料さえあれば“アレ”級のものは造れるってことだよな？」

「ああ、できるぞ」

まあ、俺は本気を出せばたぶんこっちで言う『神具級』の物だって造れると思う。

実際、『神具級』を作るのに必要そうな素材は、倉庫に腐るほどある。

ぶっちゃけ、武器・防具倉庫の中にも『神具級』のものはあると思う。

ん？

“あの”武器とかはどうしたかって？

“アレ”は一応封印倉庫に入れてあるぜ？

だって、“アレ”装備したら無敵じゃん。

まあ、スキルALL MAXの時点でもはや無敵だが。

んなこまけえこたいいんだよ！

話は戻って、

「だったら『特別級』も造れるってことか？」

「まあ、そうなるわな」

クラスが高いほう造れて、低いほう造れないってことは、よっぽど  
のことがない限りないからな。

「じゃ、じゃあ・・・」

「お、おう」

「私に『特別級』の武器を造ってもらえないだろうか？」

『・・・・・・へ？』

予想外の申し出に、俺とミラネスとラミアアが素っ頓狂な声を上げ  
る。

・・・マジですか？

たしか+6〜35の間だったよな？

ん〜。

できないことはない。

つか、片手でもできる。

まあ、造ってあげても困ることはないと思うからいいか。

「まあ、別にいいぞ」

「ほ、本当か!?!」

「ホントホント」

「あ、ありがとう!」

・・・おおう。

その笑顔は反則ですぜ。

さっきまでずっと仏頂面だったから、余計にまぶしい。

てかさ、今思ったんだけどさ、

この馬車に乗ってる女性組みレベルメツチャ高くない？

うん。

改めてよく見てみると皆さん可愛いですね、はい。

ミラネスは、儂げな美少女的な雰囲気があるものの、どこか筋が通っている印象を受ける。

ラミリアは、なんでも完璧にこなす美人系お姉さんだけど、どこか

抜けてる気がする。

サラは、クール系の美人さんだけど、さっきみたいに笑顔は超可愛い。

ユーナは、活発系美少女で、皆のマスコットの存在だ。

## 閑話休題

「じゃ、じゃあ、本家に着いたら早速造ってくれ！」

「ああ、任せろ」

「約束だぞ！」

何かサラさんが今にも鼻歌を歌いそうなほどご機嫌だ。

・・・あ、鼻歌歌ってる。

まあ、笑顔なのはいいことだよな。

P r i c e l e s s .

お金では買えないものがある。

P r i c e l e s s .

大事なことなので二回言ってみた。

笑顔（後書き）

短い

21話で投稿したのに

20話と同じになっていたという不思議現象。

ぶつつけ本番でやってるから

下書きが無いといつぶんへらあ！

死ぬかと思った。

街に到着！（前書き）

やっとだぜ・・・

街に到着！

Side:ベルム

「ふ〜んふ〜ん　　ふ〜んふ〜んふ〜んふ〜ん　　」

『……………』

サラの超御機嫌っぷりに若干引きつつも可愛いと思ってしまうベルムだ。

毎回自分の名前を言うのも飽きてきたが、これが俺の基本スタイルだ。今後もこの調子でいくぜ〜。

と、まあ、サラのおかげで幾分か空気も軽くなり乗ったときより気が楽になった。気がする。

ここはサラに感謝だな。

「まだ街に着かないのか？」

ふと俺は疑問に思った。

出発してから、もう2時間くらい時間が経ってる。

俺が感じた限りでは、この馬車は時速10kmちょいでてるはずだ。

あの場所から街まで大体20kmちょいだったはず。

だからそろそろ着いてもおかしくないんだが。

「もう少ししたら着きますよ」

「防壁ももうすぐそこにありますからね」

ミラネスが言った言葉に反応して、窓から外を確認してみる。

「おおぅ・・・」

そこにあったのは、

圧倒的な質量と存在感を放つ、

全長18mはあるであろう巨大な『壁』だった。

18mといたら某国民的ロボットアニメとほぼ同じ身長である。

日本人だったら、少なくとも100分の1の人は知っているであろうあのかさ。

それが街全体を覆っている。

まあ、俺だったらたぶん吹っ飛ばせるが。

間違ってもここでそんなことは言わない。

「何でこんなでかい防壁があるんだ？」

「え？」

「知らないのか？」

「えー？皆知ってると思ったんだけどなー？」

ふむ。

俺の質問に何一つ答えてくれないこの人たち。

その信念には脱帽

するわけあるかっ！

まったく。

ちよんと答えて欲しいぜ。

「で？なにかあったのか？」

「はい、」

長かったので省略させともらったが、簡単に説明すると、この国『デインハイド』に軍事国家である『リステイミス』が2年前宣戦布告したらしい。内容は、『今から2年後、貴殿の国に侵攻を開始する。心して待たれよ』って感じ。その結果、『リステイミス』に一番近いこの『ラインハルト』が一番最初に攻められると思い、この防壁ができた。

まあ、こんな感じでいいと思う。

それにしても

「リステイミスのやつら・・・運が無かったなあ・・・」

「え？」

「いや、なんでもない」

「？そっですか」

もし『リステイミス』がここを攻めてきたら、そんなときは俺も容赦はしない。

せいぜい自国の運の無さを呪うんだな。

とか、ただいって見たかっただけ。

でも、本当に攻めてきたら、潰すつもりではある。

つか、潰す。

「あ、ベルムさん！街に到着しますよ！」

「ん？やっとか・・・」

どつやら街に着いたらしい。

とりあえず俺が持っているこの通貨が使えるかどうか調べるのと、ギルドカードが使えるかどうかを調べる必要があるな。



ああ、わくわくしてきた。

街に到着！（後書き）

ぐふっ

まだ中に入れないの？（前書き）

あ、頭が

割れる・・・わけないか

まだ中に入れないの？

S i d e : ベ ル ム

「その馬車！止まれ！」

なぜか疎外感を感じてるベルムだ。

そんなことより。

衛兵が声を荒げて、こちらに命令してきた。

この馬車に大公の娘が乗ってるってわからないのかね？

わかるわけないか。

この馬車の外見は、普通の馬車となんら変わらないからね。

まあ、中もさして変わらないが。

あえて言つなら、窓の上に大公のマークが刺繍されてるだけだね。

このマークもどっかで見たとあるような。

メツチャ身近にあるような。

つか俺の家の家紋に似てる気がしないでもない。

つか、ほぼ同じじゃね？

うん、気のせい気のせい。

そんなはずあらへんがな。

何で口調かわってんねん。

・・・うん。

マジで落ち着こう。

落ち着け俺、まだいける。

よし、落ち着いた。

(11の間0・5秒)

話は戻して。

外見は一緒って言っても、御者の二人を見て気づかないものかね？

確か、あの二人にもさっきの刺繍と同じものがついてた気がする。

・・・もしかしてあの衛兵、新人とか？

うん、ありえるな。

ちょっと見てみますか。

(スキル『心眼』並びに『地獄耳』発動)

『心眼』

心眼とは、武術などを極めた達人が開眼するもの。氣の流れでモノの位置を把握したり、障害物に阻まれているものを見ることができる。発動しても一般の人は気がつかない。気がつくのは、同じ境地にいたった達人だけ。といっても、人それぞれに熟練度というものがああり、見える範囲や物の大きさ、鮮明度が違ってくる。

『地獄耳』

その名のとおりに地獄の如くものすごい耳。主に勘のいい人や武術

の達人、妙齢のおb・・・お姉さんが持っている。もちろんすごさは、勘く達人く妙齢の人、の順番である。さすがお姉さん。最高2km先のことまで鮮明に聞こえる。使い慣れていないと激しい頭痛を伴うため、熟練度は高い人でもせいぜいLv3ぐらい。もちろん俺はLv50までちゃんとやったが。ただ、例外もあって、お姉さんの年齢や体重のことを話すと・・・・・・・・。。ガクガクブルブル

(お、見える見える)

外の様子が手にとるように見えるぜ。

「お前達！どこのものだ！」

「ぬ？見てわからぬか？」

「その前に、貴方が名前を名乗ってください」

おほっ。

レイルのキャラが。

何かメツチャ冷酷な人になってる。

目が、目がああああああ！

ってことになってる。

「なにをお！」

「うゝむ。宣戦布告から2年経っているから、皆気が立っているのか？」

「だとしても、常に冷静でなければいけないことには変わりはありませんよ、兄さん」

「確かにそうだな」

「それは俺が冷静ではないと申すか！」

「まあ」

「そうなりますね」

「貴様等！王都騎士学園を4年で、しかも首席で卒業した、アルヴイン・ナル・シ・ブリエツト様と知っての狼藉か！」

「ブリエツトって」

「あの伯爵家の息子が」

「そつだ！俺様のすごさを思い知つたか！」

・・・うわあ〜。

俺が一番相手にしたくないタイプだわ、こいつ。

なんか、あまりのうざさに殴り飛ばしたくなってくるんだよね、こ  
ーゆーやつ。

ああ、ほら、今も俺の右手が。

しかも、伯爵とか。

この馬車に乗ってるの大公家だぜ？

公爵より上の家に喧嘩売ってるよ。

ホント、何で気がつかないんだろつね。

つか、何で貴族なのに騎士？

・・・まあ、いつか。

「ああ、ちょっといいか」

「なんだ！」

「ちよつとこの紋章、見てもらえます」

あ、デインが笑いこらえてる。メツチャ肩プルプルいってるよ。

これから起こること考えてるのかな？

俺も考えてみる。

考えてみる。

考え

「ブフツツ!!」

「!？」

「な、なんだ!？」

「い、いきなりどうしたの!？」

おっと、堪えきれなくて吹いてしまったようだ。

牛乳飲んでたらやばいことになってたな。

主に鼻の中が。

「いや、外で起こってることが、な」

「?外で何か起きてるんですか?」

「いや、街の中入ったら話すよ」

「?そうですか」

どうやら皆は興味が無いらしく、そのままガールズトークにもどっていった。

・・・外の会話聞いてたのは決して現実逃避のためじゃないからな?

・・・ホントだぜ?

気を取り直して。

「その紋章がどう……し……た……?」

「お気づきになられましたか?」

「ッ!!!?!?!」

おおう。

メツチャ口パク言ってるぜ。

しかも何かだんだん顔が青くなって・・・あ、白くなってきた。

やば、おもしれっ！

「おい、大丈夫か？」

「・・・っ！は、はいっ！も、申し訳ありませんでした！」

おお、90度！

あんな重そうな鎧でよくあそこまで曲がるもんだな。

てか、不可能じゃね？

まあ、俺だったら根性でどうにかするがな。

お？敬礼したぞ？

「い、今までのご無礼お許しください！自分の浅はかさを思い知りました！」

「まあ、それは今はいいでしょ」

「それより中に入れてくれんか？」

「は、はい！ただいま！まことに申し訳ありません！」

お？

やっと街の中に入れるか。

ふう、意外と長かったな。

いよいよ、街に入れるぜ！

まだ中に入れないの？（後書き）

？

何か違和感？

・・・まあいつか

武器製造計画（前書き）

ゆめじしゅ

## 武器製造計画

Side:ベルム

おっす。

あのあと無事に街の中に入ることができたベルムだ。

「そついえばこの馬車はどこに向かっているんだ？」

「ここでのリインハイド家の邸宅、つまり『別荘』ですね」

「ってことは、本家は別の街、俺が思うに『リインハイド』にでもあるのか？」

「そうですね」

フム、なるほど。

今向ってるのは『別荘』か。

確かサラは『本家』に着いてから、って言った気がする。

まあ、場所さえあればどこでも造れるからここで造っても良いんだが。

サラが素材を集めるといつているので、サラの好きなようにさせる

か。

・・・あ。

そういえば。

「そういえば、サラはどんな武器を作って欲しいんだ？」

「おお、まだ言ってなかったな」

「俺も今気づいた」

まあ、あん時は空気が重かったし、早く街に着いてくれって思いで、頭ん中いっぱいだったからな。

つか、あの空気で冷静だったら、マジ勇者だわ。それが誑し。

いや、マジそんな位でしょ。わかる人にはわかる、わからない人にはわからない。

これ、重要。

テストには出ないけど。

つか、でたらサービス問題だわ。

まあ、でる心配はないけど。

おっと、また話がそれたな。

「で？決まっているのか？」

「うーん、片手剣にすべきか弓にすべきか迷っている」

うーん。

それは難しいな。

まあ、この兄弟の武器から見て

デイン：戦斧      バリバリ近距離型

レイル：大剣      バリバリ近距離型

サラ：片手剣・弓      近・中距離型

ユーナ：魔杖      バリバリ遠距離型

となるのだろうか？

なかなかバランスが取れてると思うぞ。

デインが重い一撃を与えて、さらにそこにもう一撃重いやつをレイルが与える。

その時、当たらなかつたやつをサラが確実にしとめ、止めのユーナの魔法で一掃する。

うん。

連携もとりやすいし、いいチームだと思うな。

あとここに、ヒーラーとか補助系統のマジシャンが入っていれば完璧だな。

まあ、そんな都合よくないか。

っと。

今はサラの武器のことだった。

「俺的には弓が良いと思うんだが」

「どうしてだ？」

「いや、他の3人の役割を考えると中距離の弓がちょっと良いと思っ  
つてな」

「確かにそうなんだが・・・」

「何か問題でもあるのか？」

「ああ・・・」

何かあるのか、サラから返ってくるのは歯切れの悪い返事ばかり。

ん。

どうしたもんかね。

うん。

どっちも造る、

つてのは、サラのプライドが許しそうにないしなー。

つか、さっき皆の武器鑑定したら、それなりにいい武器使っているみたいだしな。

愛着でもあんのかな？

十分ありうるな。

ちなみに皆『一般級』のRANK3の武器を使っている。

『伝説級』で国宝級だから、『特別級』はたぶん家宝級かな？

んで、『一般級』となると、たぶん騎士団の隊長級ぐらいじゃないか？

まあ、あくまで俺の予想だが。

「うーん」

まだサラは悩んでいるようだ。

俺ができることはただ黙って待つだけ。

「うーん……。よし、決めた」

「お？決まったか？」

「ああ」

どうやら決まったようだ。

「で？どっちだ？」

「『』で頼む」

「ん、わかった」

べつやら『』にしたようだ。

じゃあ、次は

「色はどつするっ？」

「色……は……、『黄色』で」

「わかった」

じゃあ、後は

「こんなかのどの形が良い？」

そうやって俺は、カタログ風に弓の完成形が載ってある紙を見せる。

「おお?!これはなんだ?!」

「これは俺が造るときに、相手の希望をなるべく取り入れるために作ったものだ」

「ほおー、すごいな!じゃあこの中から選べば良いのか?」

「ああ、そつだ。・・・さあ、どれにする?」

なんかキャラが若干おかしくなっているが、俺は気にしない。

「ん〜、じゃあ、3番で」

「わかった」

3番。

これは見た目ごく普通のどこにでもあるような複合弓だ。

だが、2つ違うところがある。

1つ目。

通常の弓は、というより、大体は矢の装填数は一回につき1本。だが、この弓は真ん中は当たり前として、両翼にも1本ずつ。計3本同時に装填できる。まあ、3本同時に撃つためにはそれなりの技能が必要だけどな。

2つ目。

普通の弓は全長160cmぐらいのもあれば、220cmぐらいのものもある。前の方は一般的に洋弓で、後の方は一般的に和弓である。この弓も全長160cmぐらいの洋弓だ。だが、これは持ち運びやすさも考えて設計されており、両翼が折れ曲がるようになっていて、そうすると全長大体90cmぐらいになる。しかも展開も早く、玄人のひとは、展開した瞬間3連撃できる。

以上のことから、3番目の弓は、比較的人気が高かった。

なかなか高性能な弓だからね。

ふむ、まあ、こんなもんだろう。

「え〜っと」

今までの情報をまとめて話す。

「製造するのは『弓』で『特別級』のもの。色は黄色、製品番号は3番、っと。これでいいな?」

「ああ、問題ない」

よし。

これをメモして・・・。

「じゃ、『本家』に着いたら早速つくるよ」

「ああ、よろしく頼む」

よし。

これで一応約束の内容は決まったな。

「ベルムさん！着きましたよ！」

「お？やつとか・・・」

どうやら『別荘』に着いたようだな。





やっとか・・・。

武器製造計画（後書き）

指が痛い。

再会・・・？（前書き）

100,000PV突破！

やったね！

ありがとう！

なんか特別企画とかやったほうがいいのか？

再会・・・？

Side:ベルム

『ようこそ！リインハイド家の別荘へ！』

そう言ってミラネス達は玄関の扉を開けた。

どうも。

なんか馬車から降りたらもうすでに玄関前で、急な展開に若干ついていけないベルムだ。

まあ、気を取り直して。

「やっとついたな」

「ええ」

「いろいろありましたもんね」

「最初の目的が魔物の調査だったのに」

「ついさっきまで忘れていたな」

「ああ、まったくだ」

それはダメじゃないか？

もともとの目的忘れたらダメだろ。まあ、調査終わってから襲われたらしいからいいか。

・・・ん？

そういえば“賊”はどうした？、って？

ああ、あいつらはさっきの衛兵に渡したぜ。

なんか“賊”のこと見て『まさか・・・』とか『こいつらか？』みたいなこと言っていたけど、俺には関係ないからそのまんま放置しといた。

あ、そうそう。

それと『こいつらは処刑しないで、労働の辛さを教えてやってくれ』って言ったから、殺されはしないはず。・・・たぶん。ミラネス達も一緒に言ってくれたから大丈夫だと思いたい。

そんなことを考えていただろうか

『お帰りなさいませ、お嬢様』

「ッ!？」

メイドさんと執事さんのお迎えの声に吃驚してしまった。

どうやら表情には出ていなかったようで、誰にも気づかれずに済んだ。内心、超吃驚している。もうヤバイ。こう、ビクッ!!!、ぐらいにはなつてたね。アツ　ル社社長が死んだのを聞いたときぐらい吃驚した。

「では、改めまして」

『ようこそ！リインハイド家へ！』

うん、お邪魔します。

「では、まず自己紹介からはじめたいと思います」

『わ〜』パチパチパチ

「まず私から」

そう言ってミラネスが一步前に入る。

「リインハイド大公家次女、ミラネス・ア・エル・リインハイドです」

『わ』パチパチパチ

「次は俺たちだな」

今度はデイン達4人が一步前が出る。

「ミラネス・ア・エル・リインハイド様直属護衛部隊副隊長デイン・マービルだ」

「同じくサラ・マービルだ」

「同じくユーナ・マービルです」

「同じくレイル・マービルです！」

『わ』パチパチパチ

そう言って、デイン達は頭を少し下げる。

つか、このメイドさんと執事さんメツチャ乗り良いな。

「では次は私達ですね」

そう言って、ラミリアとメイドさん達が少し前が出る。

「リインハイド家筆頭メイド序列6位兼ミラネス・ア・エル・リインハイド様直属護衛部隊部長ラミリア・スフィルです」

「リインハイド家筆頭メイド序列5位アイサ・マビミルです」

「リンハイド家筆頭メイド序列4位クララ・エンデイスです」

「リンハイド家メイドのパティスティー・メンデスです」

「同じくメイビル・クライスターです」

「同じく！シルビア・クライスターです！」

「リンハイド家筆頭執事序列4位バルド・デザイスターです」

「リンハイド家筆頭執事序列3位カイン・ライラクナです」

「リンハイド家筆頭執事序列2位ファフニール・ジーマスです」

「リンハイド家執事のツクリス・ナタスです」

「同じくジャクソン・パーソルです」

「同じくオリバー・パーソルです」

『よろしくお願いいたします』

おお、皆綺麗に揃ってる。

てか、12人もいるよ。

俺の家で雇ってたのは5人だったからな。

つか、メイドのほうに序列1・2・3位の人、執事が序列1位の人  
がないけど、本家にいんのかな？

たぶんそうだろうな。

「あ、序列一位のタナトスさんはたぶんもう少しで帰ってくると思いますよ」

「……心読んだ？」

「え？何のことですか？」

「……どうやら偶然らしい。タイミングがよすぎるが。

てか、タナトスって名前聞くと、どうしても俺の家にいたメイドを思い出すな。

あいつは気配り上手だったけど、偶にやらかすところが可愛かったな。

おっと、話がそれたな。

じゃあ、次は俺の番かな？

よし。

「俺はベルムだ。一応冒険者をやってる。まあ、気軽に話しかけてくれ」

『わ』パチパチパチ

やっぱりこのメイドさんと執事さんのはのりが良いな。

そんなことを思っていると

「ただいま帰りました、お嬢様」

メイドさんが一人帰還しました。

いつの間にかデイン達に周りを囲まれていて顔はよく見えない。

でも、なんか声に聞き覚えがある。そう、つい最近まで聞いていたような、そんな声だ。

「あ、お帰りなさいタナトスさん。今、私にお客さんが来ていて、皆自己紹介していたところなんです」

「まあ、そうなんですか。じゃあ、私も自己紹介をしなければなりませんね」

そういつた瞬間、デイン達が横にそれた。

そこには、頭を下げたメイドさんが

「お初にお目にかかります。リンハイド家筆頭メイド序列1位タナトス・メイフェルと申します」

そう言っ頭を上げたメイドさんの顔は、よく見慣れたもので

『ツツ!!??』

思わず声にならない悲鳴を上げてしまった。

「?知り合いですか?」

ミラネスが問いかけてくるが、俺は知っている人がいた衝撃でフリーズからなかなか解けない。

「.....」

「.....ベルム様ですか?」

タナトスは俺に問いかける。

『!..!』

どうやら俺を様付けで呼んだことに驚いているようだ。雰囲気であった。

まさか、タナトス、お前なのか？

再会・・・？（後書き）

なんか分けがわからなくなってきた。

名前考えるの疲れたべ。

まあ、名前は覚えなくても大丈夫です。

これからの展開が思いつかばな・・・くもない。

広い世界にちっぽけな人間。様より誤字の指摘がありました。

お教えいただきありがとうございます。

それとShano様とヴァファリン様より

空白が多いという指摘がきました。

自分はどのくらいあければいいか分からないですが

あまり空白をあけないようにしたいと思います。

最後に一言・・・

『ラットン』が面白い！

嘘も方便とか、マジ便利(前書き)

な、なん・・・だと・・・？

・・・ついに目がおかしくなったか。

なんかPV2000000超えてた。

びっくり。

嘘も方便とか、マジ便利

Side:ベルム

「・・・」

「・・・」

『・・・』

やあ、またこんな空気を味わうことになったベルムだ。

つか、またかこの空気。

もうやめてくれ！

俺のHP（精神的）はもう0よ！

いや、マジで。

これもうやばいね。

くそ、どっにかしてこの空気を変えないと。

何かいい案はないか？

生憎、誰かに助けを求めるということはできない。

皆、怖いくらいに静かだし、声かけれねえし。

ああ、コンピュータマシンがいれば念話で話せたのに……。

うん。

うううん。

……お？

タナトスがつけてるイヤリングってもしかして！

（タナトス！聞こえるか！？）

（っ！？だ、誰ですか！？）

（俺だ！ベルムだ！）

タナトスがこちらを向くときの速度はそれはもう速いものだった。

音があつたら、

ババツツ！！

つてぐらいい。

タナトスがつけていたイヤリングは、俺が緊急用に作った通信機だ。通称『センス』だ。これは、俺が始めて作ったもので、何回も失敗しながら作ったから、欠陥は無い。念話みたいなもので声を出さなくても会話ができる。

発動条件は通信したい相手と自分が『センス』を身に着けていること。後は念じて話すだけ。タナトスはイヤリング型、俺はネックレス型だ。

とりあえず話し進めるか。

(いいかタナトス。今から俺の話に合わせる)

(え?・・・わかりました)

(よし、話はこうだ)

そして俺は話し始めた。

(まず、俺とタナトスは『リンハイド』の街中で“偶然”出会った。そこでなんやかんやあって仲良くなった。よし、決定)

(え?いやいやいや!詳細が雑です!せめてそこで何があったか話しましょうよ!)

(こまけえこたあいいんだよ!)

(いや、良くないですから!というよりぜんぜん細かくないですよ



(・・・まあ、街中でであったなら間違いなく惚れていたがな)

(・・・／／／)

やばい、反応がマジ可愛いぞ、タナトス。

っとと。

話がそれたな。

(まあ、ここは俺が珍しい武器を持っていて、話しかけたら話が弾んで仲良くなった、ってことで良いだろう)

(・・・確かにベルム様の武器は珍しい武器ばかりでしたからね)

(自作だしね)

(納得いかないこともありますけど、今はこれぐらいしか“知り合”って説明できませんからね)

よし、方針は決まった。

早速実行するぜ！

「ひ、久しぶり出すね、タナトスさん」

ビックウウー！！

「は、はい、お久しぶりですね」

あ、あれ？

タナトスが涙目だ。何でだ？

俺なんかした？

「やっぱりお二人ともお知り合いだったのですか？」

「ああ、リインハイドの街中で“偶然”会って」

「珍しいモノをお持ちになっていましたので、お声をかけさせていただきました」

「へへ、そうなんですか」

「で、会話してみたら意外に楽しくてな」

「そうですね。お知り合いというより、お友達ですね」

「そうだな」

「こんな偶然もあるんですね」

何とかごまかせたか？

ふう〜。

結構、気使っな、これ。

あとでタナトスに『何で涙目になっていたか』を聞いてみたら、

『“さん”付けされて悲しかったから』

だそうだ。

聞いた後また泣きそうになったので、今度買い物に付き合おうと思ったら、某星の名前な拳法を使う人がいる兄弟の長男も反応できないであろう速度で近づいてきて、

『じゃあ、今度の休みに行きましょう！』

とか言っていた。

まあ、こちらから言い出したことだから了承したが、あのときの速さには驚かされた。

女って怖いな・・・。

嘘も方便とか、マジ便利(後書き)

あ、熱いぜ

## 一時休止

えー

このたび一時休止させてもらいます。

理由は多々ありますが、

まあ、ただ単に俺の心が過激な感想文に耐えられなかっただけです。

これはあくまで俺の趣味みたいなもので、

誰かに見て欲しいとは思ってるわけじゃありません。

じゃあ、投稿するなよ

とか思うかもしれませんが、

それも所詮自己満足のためです。

だから感想であんなことを言われる理由も筋合いもありません。

それに、

悪い点について返信しなかったのは、

ごもつとも過ぎて、返す言葉がなかったからです。

矛盾とかありまくりですからね。

その点を踏まえた上で、読んでくれている方もいらっしやることと  
思います。

勝手に誤解して勝手に騒ぎ立てられると、

こちらとしてはとても不愉快です。

なので、この作品は、

これからの反応を見て更新するか更新しないかを決めさせてもらい  
ます。

生意気なやつ、

とか、

何こいつ偉そうにムカツク、

という方はどうぞ読まないでください。

こんなこと言っていますが、

まあ、楽しく読めるから良いよ、

とかいう心の温かい人は読んでくれるとうれしいです。

最後に・・・

この結果次第で、俺は小説を書くことをやめます。

皆さんを不愉快にさせるなら書かないほうが良いですからね。

では、ごきげんよう。

再開に向けて

えー

このたびは

大変ご迷惑をかけました。

皆さんからの感想は温かいものばかりで

久しぶりに泣けてきました。

それに一日考えて思っただんです。

別に適当でもよくね？

と。

ものすごい開き直りなのは理解してます。

ですが。

そこも含めて

俺であり、

そんな俺が書いたこの小説は、

確実に俺のものである。

と、いうことで

早速明日再開します！

早っ！

とか思った方。

それが俺です。

基本どこまでもまっすぐ

でも一度折れるとメツチャ沈む。

だが、次の日には改善策をいつの間にか考えている。

うん。

また教えられました。

俺の本質を忘れちゃならん。

まったく、読者様には頭が上がりません。

とりあえず、

あれはどうなるの？

とか

もっと細かく！

とか

ここをこつすれば良いんじゃない？

などなど

多々感想はあると思いますが、

俺は勝手に自分の書きたいことを書き続けます。

まあ、今日は疲れたんで更新できるかわかりませんが、  
がんばります。

## 再開に向けて（後書き）

あ、あと

他の作品どうするの？

できなこと書かれたんですけど

「マジチート」はだいたい案があるので

たぶん日曜ぐらいに一度更新すると思います。

「Let's thinking」のほうは、

設定はそのままです

最初から書き直そうと思っています。

「原作ブレイク」のほうは

実のところ

先3話ぶんぐらいまでできてます。

でも、なんかおかしいのでちょっと直して

更新します。

なるべく早くできるように頑張ります。

とりあえずこの世界の現状についてだろ（前書き）

ww

そう！

そのテンション！

読むほうもテンションあげていきまじょう！

俺もテンション42%ぐらいでいくから！

とりあえずこの世界の現状についてだろ

Side:ベルム

翌日

やあ、あの後初めての酒飲んだけど酔えなかったベルムだ。

え？

いきなりあの後とか言われても何があったか知らないし、気になる、  
って？

そうか。

そういえば言っただけじゃなかったな。

じゃあ、ダイジェストでお伝えしよう！

俺、タナトスと話し合わせて危機回避

皆(?) 納得

なぜか俺の歓迎会に発展

皆ノリノリ

ここでお酒投下

16歳未満は飲酒禁止で、約一名涙目

メイドさんや執事さんも混ざって・・・

ここでリインハイド家3男ロベルトス（20歳）がログインしました。

ミラネスが説明し、ロベルトスも参戦

俺と序列付きメイド and 執事以外酔いつぶれる

後片付けを済ませ、案内された部屋にin

就寝

なんかダイジエストって言ったのに長くなった。

まあ、俺は気にしないから皆も気にするな。

つか、皆って誰だ？

・・・まあ、いつか。

「ベルム様、少しよろしいですか？」

「ん？ああ、良いぞ」

「失礼します」

入ってきたのは、当然タナトス。

つか、俺のこと様付けで呼ぶのは、今のところタナトスしかない。

「少しお伺いしたいことがあるのですがよろしいですか？」

「ん？なんでしょっ？」  
「では」

そう言つてタナトスは息を吸つて、吐いて、吸つて、

「今までどちらにいらつしやったのですか？」

「！！」

ものすんごくいドスの効いた声で尋ねてきた。・・・『今まで』？

「『今まで』？・・・タナトス、今何年だ？」

「え？・・・皇暦2234年ですけど？」

「！？」

な、なん・・・だと・・・？

俺がゲームをやっていたときの皇暦は1230年の設定だった。

おれ自身ちよくちよく見ていたから、間違いない。

つてことは、だ。

ここは大体俺がやっていた世界の1000年後？

・・・マジか。

じゃあ、いろんなことが変わってんのか？

もしかしたら、通貨も変わってるかもしれないし、ギルドもなくなつてるかもしれない。

・・・ちよつと聞いてみるか。

「タナトス」

「はい？なんででしょうか？」

「今は何も聞かないで俺の質問に答えてくれ」

「???いいですけど・・・って私の質問に答えてください！」

「いいから、黙って答えてくれ。頼む」

「・・・わかりました」

よし、何とか抑えることができた。

「じゃあ、まず1つ目。今の通貨はなんだ？」

「?・・・低い順から銅貨、銀貨、金貨、皇貨です。戦争があったため、500年ほど前に戦争があつて、1000年前の通貨が大量になくなってからこうなりました。昔の金貨・・・ネルスが今の金貨になっています。大体100枚でひとつ上の貨幣に換金できます」

「・・・そうか」

やっぱり通貨が変わつてた。

俺が今かなり持つてるこの金が今じゃものすんごい大金つてことか。まあ、当時もものすんごい大金だったが。

つていうことはギルドとかも変わつてる可能性があるな。

「じゃあ、2つ目。今ギルドはあるか？」

「え?・・・ありますけど？」

「1000年前から変わったことは？」

「え?・・・えーっと、特にないです。しいて言えばランクが付けられるようになっただけです」

「ランク？」

「はい。したからF・E・D・C・B・A・A・A・S・S・S・EXです。このランクによって受けられるクエストも違ってくるみたいです」

やっぱりか……。

昔は実力さえあればどんなものだって受けられたからな。  
うん。

そうなるよ、俺のギルドカードはもう使えないのか？

……まあ、今日行けばいいか。

それにしても1000年か……。

ん？

1000年？

1000年。

……ちょっと待て。

今俺は誰と話している？

……うん。

タナトスだ。

じゃあ、そのタナトスは、いつからいる？

……そう。

俺に仕えていたときからだ。

じゃあ、それはいつから？

……1000年前。

……え？

「じゃあ、最後……なんで生きてんの？」



とりあえずこの世界の現状についてだろ（後書き）

短い！

でも、案が吹っ飛んでるからしょうがない！

感想を書いてくれた皆さん！

なんと言葉を返したらいいかわからないので

返信できません！

そこんとこ

よろしく！

俺が、神・・・だと・・・？（前書き）

やっぱり

幕間

書いたほうがよろしいのか？

あと、PV〜〜突破記念とか

俺が、神・・・だと・・・？

Side:ベルム

おつす、前回タナトス達が『真龍族』だと知って驚きが隠せないベルムだ。

いや、久しぶりに吃驚したね。

あんなに驚いたのはいつ以来だろうか？

・・・意外と近かった。

あの武器・防具とか手に入れたときだよ。

あの時はどちらかという口呆れか？

まあ、今はどうでもいいか。

「まあ、タナトス達が『真龍族』ということは分かった。他のやつらは今どこにいる？」

「えっと、リリアン達ですか？」

「うん」

「え、ナナ以外はリンハイド本家にいます」

「ナナ以外？」

「はい。ナナは1000年前からベルム様を探すために世界中を旅しています」

「・・・マジか」

「マジです。ナナはベルム様に依存していましたからね。・・・私達もものすごく心配したんですよ？」

「・・・そうか。今まで長い間心配させてしまって悪かった」

1000年もの間タナトス達を心配させていたのは事実なので、しつかり謝しておく。

それにしても1000年か……。

……長いな。

つか、長いとかの次元越えてね？

明らかに長過ぎるだろ？

これ。

よくタナトス達発狂しなかったな。

……たぶん息子達がいたからだろうな。

このゲームには一応、子孫機能があった。

別にそーゆー行為をしてつくるんじゃないぞ？

ただ、気に入った女の子と結婚して、コマンド『子孫繁栄』を選択してから1日経つと10000分の1の確率で子供ができるだけだ。実際、俺も息子3人、娘4人いたからな。

……え？

何でそんなに多いかって？

そりゃ〜、おまえ。

俺が貴族だったからだ。

一般人は一夫一妻だけど、

貴族だったら、一夫多妻も認められるんだぜ？

まあ、本妻が認めたらの話だけど。

俺の場合、妻全員がなんかメツチャ仲良しで、

会うたびに『おほほ〜』とか『まあまあ』とか『負けませんわよ?』

とかいつていた記憶がある。

……最後の、何の勝負していたんだろうか？  
聞いても

『旦那様はどつしり構えていてください』  
とか、まともに取り合ってくれないし。

### 閑話休題

「じゃあ、あいつらにも早く会いに行つたほうがいいのかな？」

「そうですね。特にナナに会うときは気をつけてください」

「え？・・・なんで？」

「さつきも言いましたが、ナナはベルム様に依存していました。それはもうすごいくらいに」

「・・・まあ、そう、だな」

「それが1000年も離れ離れだったんですよ？」

「・・・おおう」

「・・・気を強くもってください。・・・襲われるかもしれない  
が」

・・・ブルツ

な、なんか今感じちゃいけない寒気がががが。

おっと、危ない。

もう少しでもついていかれるところだった。主に精神が。

・・・そういえば

「あいつらは『センス』身に付けてないのか？」

「ナナは身に付けているかもしれませんが・・・」

「ナナは・・・直接会つてからにしよう。今俺の声飛ばしたらこの屋敷を破壊しかねん速度で飛んでくるかもしれないしな」

「そうですね。それがいいと思います。私も問題を起こされるのは

ちよつと・・・」

・・・メツチャ容易に想像できるから、あながち間違っていないだろう。

つか、絶対破壊するな。あいつだったら。

「じゃあ、リリアン達は？」

「リリアン達はベルム様からはじめて頂いた物なので、大事に保管していると思います」

「そうか・・・あれ？じゃあ、何でタナトスは身に付けてるの？」

「そ、それは・・・／／／」

「??？」

「え、え〜つとあ〜、これ身に付けていると、なんというか、その、」

「????」

「ああん、もう！ベルム様を身近に感じたかったからです！はい！」

「・・・いや、その、なんか、ありがとう？」

「／／／」カアアアア

・・・いや、俺も恥ずかしい。

「と、とりあえず！」

「ビクッ！」

「俺がこの1000年間、いや、何で今頃出てきたか、話すよ」

「・・・」

よし、タナトスも真剣モードになったな。

それから俺はもともとこの誰ということ、そしてこの世界が元々

ゲームの世界だったこと、そして、ここに来るまでのこと、全部話した。

「そう・・・なんですか・・・」

「・・・ああ」

「私達はゲームの中の存在だったんですか？」

「ああ・・・でも、俺はお前達のことずっと家族だと思っているぞ？」

「・・・知っています。1000年前、ベルム様と過ごした日々はとても楽しかったですから」

そう言つて、タナトスは微笑んだ。

「・・・ああ、やっぱりこいつらは最高だな。」

「あ！」

「ん？なんだ？」

「そうでした！ベルム様の本名で思い出しました！」

「俺の本名？」

「はい！ベルム様の本名は“ヒサノブ”様ですよね？」

「ああ、さつきも言ったと思うが、俺の本名は確かに“久信”だけどっ。」

「・・・なんか嫌な予感。」

「やっぱり奥様方達は、ベルム様を愛していらっしやっただんですね！」

「なんだ？いきなり」

「この世界に“神様”がいるのはご存知ですよね？」

「ああ」

「それじゃあ、その神様一人ひとりを振興するための宗教があるの

は知っていますよね？」

「・・・まさか」

「そうです！その中に“ヒサノブ”教というものがあるんですよ！もちろん発足は奥様方達です！」

「・・・やっぱり？」

なぐんかいやな予感すると思ったら

“ヒサノブ”教だって？

「・・・おいおい。」

じゃあ、俺はこの世界では神様扱いか？

「もしかして俺、ここでは神様？」

「はい！ベルム様を主神として、私達五人が主神を守る五大神として崇められています！」

「・・・おお。なんてこった・・・」

俺が神様だって？

「・・・マジ笑えないなこれ。」

なんかキャラ紹介しないと混乱しそうになってきた(前書き)

この回はキャラの簡潔な紹介です

なんかキャラ紹介しないと混乱しそうになってきた

ベルム・ダ・エル・リインハイド（白郷 久信）  
得意武器：特にない。あえて言うなら全部。

この物語の主人公。話すときは敬語とぶっきらぼうと友達感覚で話すあれが雑じる。  
戦闘力は3国と敵対したら、1週間以内に滅ぼせる程度。時間の大半は移動のため。  
イメージカラー：黒（たまに白）・青

ミラネス・ア・エル・リインハイド  
得意武器：杖（打撃じゃないよ！）

リインハイド家次女。おっとりした性格で、言葉遣いも丁寧。だが、一本筋が通っていて、兄弟の仲では一番頑固。何やかんや（主に兄弟のこと）で苦勞人。儂げ少女！系。  
イメージカラー：金・黒

ロベルトス・メ・エル・リインハイド  
得意武器：棒

リインハイド家三男。詳細はこれから。一応設定は交渉上手。イケメン滅べ！系。  
イメージカラー：赤・黒

ラミア・スフィール  
得意武器：レイピア

リンハイド家筆頭メイド序列6位兼ミラネス・ア・エル・リンハイド様直属護衛部隊隊長。長い。肩書きがメツチャ長い。戦闘時などはしっかりしているが、日常では天然が入る。戦闘時キリッ。日常時ぽへえ。高低差が激しい美人さん！系。  
イメージカラー：銀

デイン・マービイル  
得意武器：戦斧

ミラネス・ア・エル・リンハイド様直属護衛部隊部副隊長。こちらも肩書きが長い。マービイル家長男で、一応跡継ぎ。貴族でもある。護衛をやっているのは修行のため。豪快な性格で、誰とでもすぐ打ち解けることができる。渋いぜ！系  
イメージカラー：緑

サラ・マービイル  
得意武器：片手剣・弓

肩書きはデインとほぼ同じ。マービイル家長女。クール。非常にクール。だが、よく吃驚する。笑顔が最高です。美人さん！系。  
イメージカラー：黄色

ユーナ・マービイル

得意武器：魔杖

肩書きはデインとほぼ同じ。マービイル家次女。  
ムードメーカー。この言葉に尽きます。萌え！系  
イメージカラー：ピンク

レイル・マービイル

得意武器：大剣

肩書きはデインとほぼ同じ。マービイル家次男。

熱血男ですね。分かります。でも、基本相手に敬意を払って接する。

シヨタ〜！系

イメージカラー：赤

タナトス・メイフェル

得意武器：手甲

リインハイド家筆頭メイド序列1位。五大神のうちの一人。

完璧メイドさんだが、たまにやる。所謂どじっこ。おっとり美人！系

イメージカラー：白

リリアン・ノーズビイル

得意武器：銃

リインハイド家筆頭メイド序列2位。五大神のうちの一人。

詳細は物語で！

イメージカラー：銀（暗めの）

ドミニク・ヴェンテルーク

得意武器：西洋槍<sup>ランス</sup>

リインハイド家筆頭メイド序列3位。五大神のうちの一人。

詳細は物語で！

イメージカラー：金・黄色

ナナ・フィラケント

得意武器：ハンマー

五大神のうちの一人。

詳細は物語で！

イメージカラー：白金（銀より輝きがある）

セイン・ディバレイド

得意武器：トンファー

リインハイド家筆頭執事序列1位。五大神のうちの一人。

詳細は物語で！

イメージカラー：黒

奥方様一行

設定だけ

- 1人目、不老不死人間。
- 2人目、吸血鬼。
- 3人目、ハイエルフ。

以下モブになるかもしれない候補

クララ・エンデイス

リインハイド家筆頭メイド序列4位。

アイサ・マビミル

リインハイド家筆頭メイド序列5位。

一般メイド

パティステイ・メンデス

メイビイル・クライスター

シルビア・クライスター

ファフニール・ジーマス

リインハイド家筆頭執事序列2位。

カイン・ライラクナ

リインハイド家筆頭執事序列3位。

バルド・デザイスター

リンハイド家筆頭執事序列4位。

一般執事

ツクリス・ナタス

ジャクソン・パーソル

オリバー・パーソル

なんかキャラ紹介しないと混乱しそうになってきた(後書き)

モブがテキスト過ぎるw

そつだーギルドだいいいっ！ (前書き)

J u s t  
D a n c e

一日で全部踊りきったww

そつだ！ギルドにいじつ！

Side:ベルム

やあ、前回神様だと知つたベルムだ。

よく、まあ、俺を神格化できたものだ。

聞けば俺は、武神というくりになるそつだ。

まあ、確かに魔王倒したくらいだし、そつなるのかな？、つては思つてたけどね。

・・・そついえば、魔王復活したんだつた。

そんなことより

「そついえばユキ達はどうだつた？」

「奥方様たちですか？今もお元気ですよ？」

「え？」

「え？」

ちよ、ちよとつと待とうか、タナトスさんや。

俺は、『どうだつた？』つて聞いたよな？

その返しにタナトスは『今もお元気ですよ？』と言つた。

・・・何か話が食い違つてねーか？

「『今も』つてどゆこと？」

「え？『今も』は『今も』ですけど？」

「・・・え？生きてんの？」

「へ？・・・ああ、“また”ですか？」

“また”とはなんだ、“また”とは失礼な。

別にタナトスたちの種族は知らなかったんじゃないんで、見なかっただけだ！

・・・イコール知らないってことだな。

自分で言ってるわけわかんなくなつた。

#### 閑話休題

「ユキ様は不老不死の秘薬を飲んで、『不老不死人間』に。イザベラ様は『吸血鬼』なので、私達と同様、年を取るといふ概念がありません。ヴォルヴァ様もハイエルフなので、同様に年を取りません」  
「・・・初めて知つた」

うん。

まさかここまですごいメンバーだったとは。タナトスたちもそうだけど、嫁達も随分な人外様でいらつしやいました。

つか、そうなるとリインハイド家は不死身じゃねーか？」

「そうですね、基本不死身ですね」

「そうか・・・って、何で考えてることわかつた？」

「え？声に出てましたよ？」

・・・全然気がつかなかった。

「まあ、聞きたいことは山ほどあるが今はおいといて。今の最優先

事項は」

「・・・ゴクッ」

「・・・ギルドだ!」

~~~~~

と、いうことでやってまいりました、街中。

もちろんタナトスも一緒に。

おかげでみんなに変な目で見られるよ。

・・・え?

お前も十分原因を作ってるだろ、って? いやだな。

俺の格好を考えてみなよ。

黒髪黒目黒服・・・。

・・・うん、十分怪しかった。
なんか、ごめん。

「ベルム様。着きましたよ」

「ん? おお、そうか」

・・・ここがギルド、か。

随分とまあ立派になっちゃって。

3階ぐらいはあるんじゃないか?

・・・うん、あるな。

「お入りにならないのですか?」

「いや、今入る」

久しぶりだから緊張してきたぜ。

・・・嘘だけど。

でも最後に行ったのが1週間前。

・・・結構久しぶりかも。

普通、1日に1回は来るべきところだからね。普通は。

そう普通は。ここ重要。

俺みたいにカンストになると、クエストよりモンスター狩って、素材売ったほうが金になる。

まあ、そんなことしてたのは俺だけだが。つか、そもそもカンストプレイヤーが俺しかいなかった。

ギイイイ

『・・・』

「さ、行きましようか」

「そっだな」

なんかギルド内にいたやつらが俺たちが入ってきた瞬間に固まった。約半分は驚き、もう半分は崇高、極少数の人は何か怪しく笑っている。

・・・あの笑みは下心全開の笑みだな。

まあ、タナトスはかなり美人だからな。しょうがないとは思っ。

だが、手を出したら容赦はしない。

つか、まずこの中にタナトスに勝てるやつがないだろーな。

こっに見えても5人の中で2番目に戦闘力が高い。あくまで俺からし

たらだが。
1 番目は言わずもがな、ナナだ。
あいつはもう以上だな。
本職の人以上にスキル使いこなしていたぞ。
恐るべし、ナナ。

閑話休題

「とりあえず登録しますか？」

「いや、このギルドカードが使えないか聞いてみよう」

そう言っただけは、ゲームの中で使っていたギルドカードを出す。

「そうですね。もしかしたら、使えるかもしれないね」

「ああ。まあ、使えなくてもどんなモンスター倒したかわかるところから、いきなり最低ランクから始めなくてもよくなるかもしれないな」

とりあえず、受付嬢がいるところに行くと思いますか。

テクテクテク

「ちょっといいか？」

「ようこそ冒険者ギルドラインハルト支部へ！今日はどのようない用件でいらっしやっただのでしょうか？」

「ああ、このカードなんだが・・・」

そう言っただけは俺はギルドカードを差し出す。

「??これがどうかしましたか？」

「そのギルドカードは使えるか？」

「え？・・・申し訳ございません。どうやらかなり古いようですので、お使いいただけません。これは誰のですか？」

「俺のだが・・・」

「そうですか。でしたら、新しいギルドカードを発行しますね」

「頼む」

「では、今までお倒しになったモンスターを拝見させていただきます」

そう言つて受付嬢はなんかタイプライターみたいな機械に俺のギルドカードを挿した。

「えっと、随分沢山倒したようですね。オークにオーガ、ケンタウロスにブラックバット。ほえー、ラミナミナリアスも倒したんですか。それに？ヨルムンガンド？・・・ヨルムンガンド！？え？え！？しかもフェンリルってなんですか！？」

「ちょ、もち・・・コホン、落ち着け」

周りに聞こえるでしょ。

今もなんか聞き耳立ててる冒険者いるし。

つか、今のこの場にいたほとんどのやつに聞こえたくね？

・・・なんか寒気がするんだが気のせいだな、うん。

「と、とりあえず、ギ、ギルドマスターを、よ、呼んできましょう！」

お、おおっ。

メツチャカミカミ。

これで噛みま・・・コホン。

ダメだな。

最近どうしてもネタに走ってしまっ。どうにかしないと。

「ヨルムンガンドにフェンリルって……。ベルムさまはいつたい何と戦っていたんですか？」

「何って……。魔王とか神界の怪物？」

「はあ、聞いた私がバカでしたね」

なんだタナトスのやつ。

メツチャ大きい溜め息つきやがって。

犯すぞ、コラ。

……。ブルルツ。

今なんか感じちゃいけない寒気が。

しかもタナトスがこっちを頬を赤くしながら向いてきたんだが。

……。ナンダコレハ。

ま、まあ、今はギルマスが来るまでおとなしくしとこうか、うん。

そつだー！ギルドにいいつー！（後書き）

めちやくちやくww

隠し曲が某赤い帽子かぶったおっさんだったww

ま、こんなもんか？（前書き）

腕が痛い

最初のくだりネタなくなっただんで

やめますねw

ま、こんなもんか？

Side:ベルム

「お待たせいたしました。私がこのギルドマスターです」

そう言つて、メツチャごついおっさんが出てきた。

・・・なぜに敬語？

なんか風貌からして、豪快のおっさんに見えるんだが。

周りを見てみると、おっさんのほうを見て驚いている人が数名。

・・・やっぱり普段は豪快爺さんなのか？

まあ、今はそんなことはどうでも良いか。

「いや、そんなに待つてないから大丈夫だ」

「そうですか」

うん、メツチャ違和感。

マジやばい。

なんだこれ。

あれだ。

スト アイのザン エフの見た目で敬語。

お分かりいただけただろうか？

・・・正直どうでも良いですね。

「では、討伐モンスターを拝見させていただきます」

「どござ」

「・・・ウロボロスにニーズヘッグ・・・ガーゴイルまで・・・クラیکنもか・・・そして、窮めつけはフェンリルにフェニックスにヨルムンガンド・・・」

「・・・そんなのいたっけ？」

「はあ」

あ、またタナトスため息ついた。

つか、ギルドマスターの顔色があまりよくない気がする。

なんか青い通り越して、もはや白い？

そんな感じ。

「・・・わかりました」

「それでどうだ？」

「・・・これだけすごいものを見せられたのは初めてです。もし素材などを持っていたなら、拝見させていただきませんか？」

「ん？ああ、いいぞ」

ん。

とりあえず、『フェンリルの毛』を取り出すかな。

フェンリルとフェニックスとヨルムンガンドの中で一番安全だしな。

フェニックスの素材出したら、物によってはここが大火事になる。

ヨルムンガンドは、意志が弱いやつが見たら精神もってかれる。

・・・うん。

おとなしくフェンリルの素材だしとこ。

「ほい」

「・・・なるほど。見ただけでわかります。何者も通さぬこの剛毛。それに、自由自在に形が変わる柔軟性。全耐性にも強く、この手触り。まさに至高の素材ですな」

「いや、そんなにすごいか、これ？」

「ええ、ベルム様は自覚はないかもしれませんが、まず今手に入れられる人はいません。私達でもほぼ無理です」

へえ、そんなすごいのか。

それだったら『フェンリルの剛毛』とか『フェンリルの鋭牙』はどうなんだろう？

あれ、『フェンリルの毛』よりドロップ率悪いんだよね。まあ、いっぱい持つてるけど。

閑話休題

「じゃあ、俺のランクはいくつになる？」

「そうですね・・・」

そう言っつて、ギルマスはあごに手をあてて考え始める。

考える。

考える。

考える。

・・・

「・・・私の一人では決められません。本部のギルドマスターに指示を仰ぎたいと思います。なので、一時的に『S』ランクとします」「ん？・・・了解した」

どうやら『S』ランクらしい。

ん。

俺は『EX』でもぜんぜん良いと思ったんだが。

自意識過剰じゃないよ？

ナルシじゃないよ？

実力的に倒せない敵はいないと思うから、いったただだよ？

・・・いや、まじで。

これは割りと真面目に言ってるぞ？

まあ、その話は置いていて。

「では早速ギルドカードを発行したいと思います。手数料として銀貨5枚お支払いいただけますか？」

「あー・・・金貨しかないが大丈夫か？」

「はい、問題ありません」

どうやら良いようだ。

俺は金貨しか持ってないからな。

今のうちに銀貨とか見とかないと。

「確かに金貨1枚いただきました。銀貨95枚お支払いします」

「ああ・・・確かに95枚あるな」

持ち前のスキル『超速思考』で瞬時に枚数を確認する。

このスキルも読んで字の如くなので、説明は要らないだろ。

「では、少々お待ちください。・・・ハル君、すぐに発行を」

「は、はい！しょ、少々お待ちください！」

あ、さっきの受付嬢さん、いたんだね。

しゃべらないもんだから、いないと思ったよ。

つか、この位置からギルマスが邪魔で見えなかった。

ギルマスでか過ぎ。

てか、ハルって名前なのね。

よし、覚えた。

「それではベルム様。発行されるまで、次にどこに行くか予定を立てておきましょう」

「そうだな・・・武器・防具店とか雑貨店とか見てみたいかも」

「？ベルム様が造ったものがあれば、ぜんぜん大丈夫だと思うんですが」

「いや、今の基準を見てみたくてな」

「そうですね。昔よりかなり低くなっていますよ？たぶん1000年前が最盛期だったと思います」

まあ、あんなところは伝説の武器とかバンバン出てきたからな。

俺も、集められるものは全部集めたしな。

もちろん隠しアイテムも全部。

今も倉庫の中に入ってるぞ？

まあ、その中に呪われたモノなんてやつもあるから、迂闊には取り出せないがな。

持ったら即死とか。

マジ鬼畜。

もてねーじゃん、とかあの時思ったけど、つまり持たなければいいのね、と思って直で倉庫に入れたし。

使うときも倉庫からそのまま放出。

触っても何も起こらないけど、少しの間（1分ぐらい）近くにいただけで簡単に逝くけどな。

おっと。

また話がそれたな。

で、何の話だったけ？

・・・ま、いつか。

「ベルム様、こちらが新しいギルドカードとなります」

「ん、ありがとう」

「いえいえ。これが仕事ですから」

よし、ギルドカードももらったし行くか。

そういえば。

「ギルドマスター、貴方の名前は？」

「おっと、これは失礼しました。私の名前はダイタンと申します。

以後お見知りおきを」

「ああ、よろしく。・・・ところで、何で敬語なんだ？」

「・・・私達ギルドマスターは職業柄、観察眼を求められます。この人は盗賊、この人は一般市民、この人は近衛騎士などなど、一目見ただけでどんな人か見分けることができます。そして、貴方様は・・・“神様”ですよね？」

「・・・いやー、よくわかったね？まあ、おれ自身“神様”って知つたのはごく最近なんだけどね」

そう、まだ知ってから半日もたってねーよ。

マジ俺何やってんだろ。

「だから敬語だと？」

「はい」

「ん、了解」

ギルマス。

一目見ただけでどんな人かわかるとか・・・。

まじ侮れんわ。

さすがギルマス。

経験が違っね。

「とりあえずもう行くわ」

「はい、またのご利用お待ちしております」

「じゃ、行くかタナトス」

「はい、行きましょう」

タナトスを伴ってギルドを後にする。

さあ、次は武器・防具店だ。

ま、こんなもんか？（後書き）

腕が痛くて短くなった

クオリティー低っ！・・・くもないか？

Side:ベルム

「さて、武器屋ですが」

「おっ」

「どこから行きます？」

「・・・いくつあんの？」

「えっとー、3店ですね」

3店もあんの？

ありすぎじゃね？

そんな武器いらねーだろーよ。

せめて2店だろ。

一般用と金持ち用みたいな。

市民用と貴族用ともいうのか？

・・・違つか。

まあ、いいや。

「特徴とかあるか？」

「えっと、1つ目が所謂駆け出しから中級冒険者ご用達のお店ですね」

「ふむ、じゃあ、そこから行ってみるか」

「え？後2つはいいんですか？」

「ああ、これはあくまで今の基準を見るためだからな。最初は皆どんな武器を使ってるか知るのが良いと思ってな」

「なるほど。では、こちらです」

とりあえず一番安そうな店からにする。

別に買うわけじゃないから。

あくまで今の時代の基準をはかるだけ。

掘り出し物があったら買うかもしれないが。

その可能性も0じゃないが、かなり低いだろうな。

めったに掘り出し物なんてお目にかかれなからな。

・・・あれ？

俺、ほとんどの武器とか防具とかアイテムとか持ってるよね？

・・・買わなくてよくね？

・・・コホン。

まあ、とりあえず今は武器屋に行こう。

徒歩数秒

「着きましたよ」

「早っ！ どんだけ近いんだよ！」

「ギルドから50mあるかないか位ですね」

「・・・まあ、武器なんて冒険者と貴族ぐらいしかめったに買わないからな。そりゃそうか」

「そうですね。でも、『ラインハイド』では、市民も普通に帯剣していますよ」

「・・・何それ怖い」

「市民が帯剣してるって・・・。
怖くね？」

「すれ違う人が普通に剣持ってるんだぜ？
軽いホラーだぞ。」

「では中に入りましょう」
「・・・ああ」

とりあえず今は基準をはかることに集中しよう。
・・・決して現実逃避じゃないよ？
まだ現実知らないからね。

店内

「らっしやい！今日はどんな御用で？」
「ああ、ちよつと店内を見せてもらって構わないか」
「ああ、いいぜ」

よし、じゃ、鑑定開始だ！

鉄の剣 + 1 物攻 1 0 腕力 + 3
特殊効果：なし

木の盾 + 1 物防 1 0 防備 + 3
特殊効果：なし

鉄の槍 + 1 物攻 1 2 腕力 + 2
特殊効果：なし

鉄の斧 + 1 物攻 1 2 腕力 + 4 防備 - 1
特殊効果：なし

黒鉄の剣 + 1 物攻 2 0 腕力 + 4

特殊効果：なし

鉄の盾 + 1 物防 2 0 防備 + 4

特殊効果：移動速度小 (DOWN)

黒鉄の槍 + 1 物攻 2 4 腕力 + 3

特殊効果：なし

黒鉄の斧 + 1 物攻 2 4 腕力 + 5 防備 - 1

特殊効果：なし

鋼の剣 + 1 物攻 3 0 腕力 + 7

特殊効果：移動速度小 (UP)

鋼の盾 + 1 物防 3 0 防備 + 7

特殊効果：衝撃吸収小 (UP)、移動速度小 (DOWN)

鋼の槍 + 1 物攻 3 6 腕力 + 6

特殊効果：速撃

鋼の斧 + 1 物攻 3 6 腕力 + 9 防備 - 2

特殊効果：我慢

ふーん。

なかなかいい武器もあるな。

でも、鋼系は金貨 3 枚から最高で金貨 1 0 枚のもある。

これは初心者にはちよつとどころか、かなりきついな。

初級クエストはたぶん銅貨 2 0 枚ぐらいだろ？

仮に 1 日 1 回クエスト達成して、なんにも使わなかった場合とし

て、

20銅貨×5日＝100銅貨＝1銀貨

になるだろ？

で、最低で金貨3枚だから

300銀貨×5日＝1500日

・・・だいたい4年と1、2ヶ月？ぐらいかかるな。

まあ、実際は宿代とか食事代とかあるから、5年はかかると思う。

ここの宿、一週間で大体15銅貨ぐらいだったからな。
さっき見た。

閑話休題

「ふむ、なかなか良いものが揃ってるな」

「へえ、わかるんですかい？」

「ああ、これでも伊達にいろんな武器を見てきてないからな」

「じゃあ、これとかどうですか？」

豪剣の刀＋5 物攻225 腕力＋32 俊敏＋35

特殊効果：鉄壁、連撃

「！」

「この武器、大分昔からあったらしんですが、誰もつかえるものがないくて。しかも、切れ味が恐ろしいくらい悪いんだよ。それに、

「すごく軽いんだよ。やっぱりこれは駄作か？」

「……これはオレの故郷の武器だ」

「!……へえ、じゃ、あんた使えんのか？」

「まあ、一応は、な」

「じゃあ、これ買わないか？こいつもちゃんと扱えるやつに使って
もらいたいだろうしな」

「……わかった。いくらだ？」

「タダで良い……といたいんだが、これも一応商品なんだ。だ
から銀貨70枚だ」

「わかった」

俺はさっきおつりでもらった銀貨の内70枚を店主に渡す。

「はい。大事に扱ってくれよ？」

「ああ、わかってる」

こうして俺の新しい武器が増えた。

この武器は職業クエストでもらえる武器だったはず。

『剣豪』だから上級職だっけか？

忘れた。

まあ、職業『剣豪』じゃないやつはまず持てない武器だな。

しかも、『特別級』のRANK3だ。

それを70銀貨で手に入れた。

なんか今日きてんじゃね？

なんてな。

クオリティー低っ！・・・くもないか？（後書き）

眼が痛い

さあ、次は・・・雑貨店なの？（前書き）

今日車に轢かれて人差し指が痛いw

自転車のタイヤがグニヤっですんだからよかった
だから今日は短いです。たぶん。

さあ、次は・・・雑貨店なの？

Side:ベルム

「さあ、次は・・・雑貨店行くか」

「え？他の二つは行かなくて良いんですか？」

「ああ、大体基準はわかったし、他の二つもちよっとの違いはあれどほぼ同じだろうしな」

「まあ、確かにそうですね」

と、いうことでやって参りました。

雑貨店です。

いろいろあります。

そう、いろいろ！

簡単に紹介すると、アイテムとアクセサリ فقط。

まあ、アイテムの中にも回復アイテムとか攻撃アイテムとか畏とかいろいろあるけど。

アクセサリも指輪とかネックレスとかイヤリングとかいろいろあるけど。

まあ、とにかく中に入るうか。

カランカラン

「いらっしやませ」

そう言って出てきたのは美人なおねーさん。

出る場所は出て、引っ込むところは引っ込んでる。

タナトスと似ている体系だ。

そう、タナトスも『ぼん！きゅ！ぼん！』なのだ！

つか、俺が雇っていたメイドは皆『ぼん！きゅ！ぼん！』だけだな。嫁はユキがタナトスと似た体系、イザベラはスリム体系（胸は並ぐぐらい）、ヴォルヴァはどちらかという和美少女体系（なんか可愛いみたいな）。

ま、皆可愛いし優しいから大好きだけど。

閑話休題

「店の中を見せてもらっても？」

「どうぞ。あまり自慢できるものはありませんが、品質は高いほうだと思います」

品質？

品質ってなんだ？

・・・＋のことか？

だったら確かにあった気がするけど。

・・・うん、アイテムにもちゃんと＋とかあったな。

俺が作る回復薬は常に＋8以上だったな。

なんか＋7からおいしくなるらしい。

一般に出回ってるやつはいいやつでも＋3ぐらいしかないから、不味いらしい。

俺は飲んだことないからわかんね。

「とりあえず鑑定してみるか」

前回と同じ感じなので省略

「ふむ、だいたいわかったな」

ここの店の最高品質は+5。

一般より断然品質は高い。

だが、場所が場所だけにあまり客が来ていないようだ。

まあ、裏路地通ってわざわざ来るやつは普通じゃないと思うからな。何度も言うが、俺は普通じゃないから。

一応スキル『薬剤師』も極めてるから、調合100%で、必要材料軽減される。

だから、ローリスクハイリターンってことだ。

まあ、俺のことはどうでも良いからそこらへんの虫に食わせるとして。

「結構品質は高いようだな」

「ええ、それだけが家の取り柄なんで」

「ああ、この品質は誇って良いと思うぞ?」

「そうですか?ありがとうございます」

うんうん。

やっぱり美人さんの笑顔は最高だね。

この世に笑顔にかなうものはないね。

と、いうことで。

「ここにある回復アイテム、全部くれ」

『・・・え?』

まとめ買いをしてみました。

未来を見据えて

Side:ベルム

「本当に全部買っんですか？」

「ああ」

「本当に？」

「ホントに」

「・・・ありがとうございます！」

うんうん。

全部買っでー。

ちよつと大量に要る用事ができたからねー。

・・・まさか、あんなことになってるとは思わなかったが。

あの子供たちのために俺は買っぞー！

「全部で銀貨62枚になります」

「金貨で良いか？」

「はい。・・・はい、確かに金貨一枚受け取りました。38銀貨のお返しです」

「・・・確かに」

「ありがとうございます！」

とりあえず買った回復アイテム（黄色ポーションとか青ポーションとか）は倉庫の中に直入れる。

店員さんが驚いていたが、慣れてるので気にしない。

そう、気にしない。

気にしたら負けだ！・・・と思う。

「よし、じゃあ行くか」
「・・・」

街中

「ベルム様」

「んー？なんだー？」

「少しお聞きしたいことがあるのですが」

「おう、いいぞ」

「・・・なぜあんなに大量の回復アイテムをご購入されたのですか？」

「・・・ああ、そのことね」

タナトスがさっきの大量購入について聞いてくる。
やっぱり聞いてきたか。

さっきからずっと黙ってたから、このことについて聞いてくるとなんとなく予想ができた。

「・・・次ぎ行くところでわかると思う」

「・・・わかりました」

「じゃ、次は」

移動中

さてやって参りました。

え？

どこにかつて？

いやだな〜。

市場に決まってるでしょ市場に。

え？

何で？

市場に着たらやることはひとつだろーよ。

食料だよ、食料。

それ以外に何がある？

・・・そうですね。

いろんな出店がありますね。

アイテムとか普通に売っていますね。

なんか、すいません。

「ベルム様、もしかして・・・」

「わかった？」

「・・・はい。やっぱりベルム様はお優しいんですね」

「いやいや、ただの自己満足だよ」

「それでも、です」

「ははは・・・ありがとう」

「いえ、本当のことを言っただけです」

そう言っただけで微笑むタナトス。

あゝ、やっぱりわかったか。

さすがタナトス。いろんなことに鋭い。

伊達に1000年以上生きてないね。

さて、俺が何をしようとしているか。

答えは簡単。

“子供達”に与えるのだ。

『過去の遺産 英雄に受け継がれるもの』
には、オンラインゲームには珍しい政治機能がある。

ある程度上位の貴族になるか、国にかなり貢献したりすると、一時的に政治に参加できる。

そのときもとめられるのが『知恵』だ。

これ値が高いと、珍しいものが店に並んだり、アイテムなどの金額が安くなる。

それと、人口も増えていき、臨時給金も多くなる。

逆にこの値が低いと、売り切れた品物がなかなか補充されなかったり、アイテムなどの金額が高くなる。

その状態が続くと『レス』という子供達が出てきてしまう。

この『レス』という子供達は、あまりの貧しさに捨てられた子供や両親が死んでしまった子供達がほとんどだ。

それ以外は親や雇い主から逃げてきた、などの理由もある。

つまり、家もなければ食べていけないあてもない子供達のことだ。

それが今、ここ『ラインハルト』に少しではあるが、いる。

さつき武器店から雑貨店に行くとき、1人そんな子供を見つけた。

髪はボサボサ、服はボロボロ、体のあちこちに擦り傷がある。

見た瞬間、『まさか』と思った。

スキル『状態鑑定』で、その子供の状態を見たところ

HP 7 / 20

MP 3 / 10

体力 8 / 20

となっていた。

すぐに回復させてあげようと思ったが、気がついたら何処かに消えてしまった。

だが、その時俺は確信した。

『俺がいる国の一部が腐ってやがる』

と。

正直、腸が煮えくり返りそうだった。

俺も政治に参加したことはあるが、『レス』は1人もでなかった。腐ってるやつらは俺がじきじきに制裁を加えたからな。

他の国では最低1人は出てしまったらしい。でも、すぐに保護された。

だが、さっき見た子供は明らかに状態がひど過ぎた。なぜ、誰も助けないのか？

政府の連中は何をやっているのか？

この代表は何を見ているのか？

そんな思いで俺の頭ん中にはいっぱいだった。

だから、俺が助ける。

誰かが助けないと、いずれ死んでしまう。

ここはゲームじゃない。

死ねば終わりだ。もう生き返らない。

だから助ける。

たとえ誰かに文句を言われても、そいつをシバいて助ける。

たとえ国を敵に回したとしても助ける。

・・・まあ、こんなことで国は敵に回ったりしないと思うが。それに、たとえ国が敵に回ったとしても、勝てる自身がある。もちろん俺一人で、だ。

だから、見てみぬ振りなんてしない。

未来を担う子供達のために。

未来を見据えて（後書き）

なんか途中からへんになった。

早速行動開始だぜ！

Side:ベルム

「よし、食いモンも買ったしいくか」

「そうですね」

なんかタナトスさんがやけに上機嫌です。
なんでだろ？

・・・まあ、いつか。

「まずは居場所を確定しないとな。タナトス、心当たりはないか？」

「そうですね・・・」

俺の問いかけに考え始めるタナトス。

たぶん、今日までこのことを知らなかったっぽいから、たぶん分からないだろーな。

まず、知ってたら俺と同じことすると思うからな。

タナトス達は。

こいつ等もかなりのお人好しだし。

子供大好きだし。

「・・・もしかしたら」

「ん？心当たりがあるのか？」

「いえ、ただなんというか・・・」

「どうした？歯切れが悪いな」

「・・・この街の『第三区画』の隅に使われなくなった屋敷があるらしいんです」

「ほうほう」

「・・・それで先日からある“噂”がたっているんです」
「どんな？」

「『夜になるとある一室に明かりが灯り、多くの小さな影が動き回っている。 “小鬼”が住み着いている』・・・という“噂”です」

「なるほど・・・その小さな影が？」

「はい・・・あくまでも私の推測ですが」

「んー。たぶんあつてると思うよ？何かそんな感じがするし」

「・・・理由を聞いても？」

「勘」

「・・・ベルム様の勘は恐ろしいぐらい中りますから、納得です」

それにしても『第三区画』か・・・。

・・・それってどこ？

俺、昨日来たばかりでわからないんですが。

・・・まあ、そこんこはタナトスに任せておくとして。

俺の勘はものすごく中る。

・・・別に『俺様かつこいい』みたいなナルシストじゃないよ？

何か常時発動型スキル『神様の気まぐれ』と『野生の勘』が合わさって、ほぼ100%勘が中る『なんとなく予知』ってのができてた。

『常時発動型スキル』

常時発動型スキルとはその名の通り、常に発動した状態のスキルのことを言う。たとえば今俺が言った『神様の気まぐれ』は、その中でも超レアの部類に入る。効果は『願望や想像を時々叶って、なんとなくが運命につながる』とかいうふざけたスキルだが、手に入れたらびつくり、そこから出るわ出るわの隠し部屋。おまけに強力なアイテムばかり出てくる。獄炎剣『レーヴァンティン』を手に入

れたときとか、マジで発狂しそうになった。神器の1つで『すべてを無に還す地獄の剣』と紹介されていて、『即死』効果を携えたものすごくレアな武器だ。

ああ、話がそれたな。

で、何かいつの間にかもうひとつの『野生の勘』と合体して（といっても2つとも残っているが）、この『なんとなく予知』ができたってこと。

『なんとなく予知』

その名の通り、なんとなくこうかな？とか、たぶんこうだろうな？とか思ったことが現実起こる。ここで大事なのは『なんとなく』ってことだ。確信が持てる情報だったら、このスキルは役に立たない。逆に情報とかが少なく『なんとなくこうな気がする』と思ったことが、ほぼ中る。つまり、『優柔不断』な人には欠かせないスキルなのだ！！

・・・違うか。

まあ、こんな感じかな？

俺の勘が良く中る理由は。

まさかスキル同士が勝手に合体するとは俺も思ってもみなかったから、かなり驚いた。

友達に言っても

『え？・・・ないないない！そんなことあったら、スキルの数がやばくなっちゃうってww』

とかいわれた。

何かムカついたからその場で軽くぶっ飛ばしておいた。

『地獄竜の迷宮』に。

「んじゃ、早速いつてみるか？」

「そうですね。速ければ速いほど、あの子達を早く救うことができると思います」

「ん、了解。・・・じゃ、案内よろしく」

「分かりました。・・・何か最後締めませんでしたね」

「うるさいやい。こまけえこたあどおでも・・・良くないか」

「そうですね。細かいことまで気にしないと、ここでは死にますよ？・・・まあ、ベルム様は魔王を『暇だから』って理由で倒してしまわれるほどお強いので、その心配はまったくありませんが。そもそも 中略 というより、ベルム様と闘った魔王には同情しざるを得ません。本当にご愁傷様でした、魔王さん」

「・・・肝に銘じておきます、はい」

ああ、長かった。

やっぱり迂闊に発言しなきゃ良かった。

くそ、1時間前の自分を殴ってやりたい。

え？

いつの間にそんなに経ったかって？

そりゃタナトスが1時間もずっとしゃべり続けてたんだよ。

休まずに。

途中から俺のこと褒めちぎってきたから、メッチャ恥ずかしかった。

今度からは気をつけよう、うん。

早速行動開始だぜ！（後書き）

指がもう少しで全快するw

突撃！隣（区画）のお屋敷！

Side:ベルム

前はえらいめにあったベルムデス。
精神的にメツチャ疲れてやばかった。
おかげで本来の目的忘れるところだった。
恐るべし、タナトス。

と、無駄話はここまで！

やって参りました、廃屋敷！

もうあれだね。ほらあれ。

バイオ ザードとかファイナルな幻想とかに出てきた？廃屋敷にすぐく似てる。

まあ、窓とか割れてないし、変な機材も置いてないだろうけど。

「ここか・・・」

「はい」

「意外と近かったな」

「そうですね。なんてたって、隣の区画でしたから」

「・・・マジで？」

「マジです」

「・・・」

まじか。

さっきの区画って第二か第四だったのか？
そこらへん詳しく聞かか。

「そつえば区画ってどうやって区切られてるんだ？何か決まりがあるのか？」

「そうですね。基本その区画で何をやっているかは決まっていますね」

「たとえば？」

「たとえば、『第一区画』は市場や役所などがあります。城門を入ってからすぐのところなので、一番活気があり、人で溢れかえっています。私達は、貴族専用の城門から入ってきましたから、すぐに屋敷にすることができました。次に『第二区画』。ここは武器・防具店や雑貨店、鍛冶場があります。基本ここには冒険者ギルドや鍛冶ギルドの方が多いです。そのほかにも、生活必需品などを買い求めてやってくる人などもいます。最後に『第三区画』は主に一般市民や貴族の住居があります。お城に近ければ近いほど身分が高くなり、離れたところには民家が立ち並んでいます。もちろんリインハイド家はお城のすぐ側です。まあ、これはあくまで『リインハイド』の区画決めで、ここ『ラインハルト』にはお城がありませんので、中心部分には『リインハイド家』の別荘があります」

「なるほど。大体分かった」

ふむふむ。

なかなかいい区別のしかたじゃないか。

おっと、失礼。感嘆のあまり、つい変な語尾になってしまった。

でも、なかなか考えられた区切り方だと俺は思う。

たぶん一般市民と冒険者のいざこざを少なくしようと、こんな風に分けられたんじゃないだろうか？

冒険者の中には、気性が荒いやつだ少なくないからな。

偶にそいつらが何かしらやらかすんだよな。

俺がゲームやっていたときも、プレイヤーがNPCにキレてることを度々目撃した。

まあ、すぐ鎮圧したけど。冒険者のほうを。武力的に。

「でも、何でこんなにでっかい屋敷が、こんな隅にあるんだ？」

「ここはかつて『ビハルダーイン』家が一般の人と仲良く暮らすために建てた家なんです」

「へえ」

『ビハルダーイン』家なかなかいい考え持ってるじゃん。

でも、一般市民にはちよつと・・・かなり大き過ぎたんじゃないか？この家。

「んで？それからどうなったんだ？」

「はい。『ビハルダーイン』は、10年前王都に呼び出され、今はそちらにお住みになられています。この屋敷は、『自由に使ってください』と一般市民にあげたそうです」

「なかなか太っ腹だな」

「ええ。一度お会いしたことがありますが、とても気さくな方で、笑みを絶やさない方でした。心を探ってみましたところ、本当にこの国を良くしようと頑張っていることがわかりました。まあ『この国に“腐った”やつは要らない』という、ベルム様の考えに賛同した特殊部隊が“腐った”やつらを徹底的に排除してますから、当たり前ですが」

「・・・何ソレ怖い」

何その特殊部隊！

なんか寒気がするぞ？

・・・いや、待てよ？

俺のその言葉に賛同しているってことは、もしかして！

「その特殊部隊って・・・！」
「はい、ベルム様のお考えになったとおりかと思われませう」
「そうか、あいつらか・・・っ！」
「はい。今も鍛錬を怠らず、さらに腕に磨きがかかっていますよ？」
「そうかそうかっ！・・・あれ？もしかいてあいつらも？」
「はい。基本不死身の方からユキ奥様の薬を飲んで不老不死になつた人ばかりです。ですので、あのころのメンバーは今も全員健在です。変わったといえば、新メンバーが何年か置きに加わったことでしょうか？そんなところです」
「・・・もはや軍隊ですね」
「・・・そうですね」

ああ、でもうれしい。
まだ俺の知っているやつらがいっぱい生きているなんて。

俺の家族と俺が雇った5人、それに俺が作った部隊の15人・・・。

「皆俺を待つててくれるかな？」
「はい。いつの日かひよっこり帰ってくると私達は信じていました」
「・・・改めてありがとう、タナトス」
「いえいえ、その言葉は私だけではなく、皆に言ってください」
「・・・分かった。覚えておくよ」

・・・？
待てよ？

あいつらがいるのに何で『レス』が出るんだ？
・・・たぶんあいつらにはれないように、よほどうまく隠しているか、位が高過ぎて下手に手出しできないかの2つだな。

・・・よし！

まずは今やることに集中しよう！

というこどで

「早速屋敷に突撃だ！」

「了解です！」

そう言つてタナトスが取り出したのはピッキングツール。・・・ピッキングツール！？

「ちょ、おま、何で持つてるし！？」

「え？メイドや執事の必需品ですよ？」

「・・・お前ら強盗かつ！」

「いえ、ご主人様を満足させるのが私達の仕事なので。それがたとえ火の中水の中、人の家の中や皇龍のお腹の中だつて入つていきますよ！」

「いやいやいや！皇龍の腹の中に入つちゃダメだろ！確かにそんなクエストあつたけど！」

『皇龍』

名前を聞いただけでほとんどの人が逃げ出すSSクラスモンスター。そのでかさは全長100m以上にも及ぶとされ、まず討伐するのは不可能といわれて“いた”。鱗はミスリルより硬く、そのブレスは大地を割るといわれている。一撃でも食らつたら終わり。そう言われて“いた”。だが、クエストで『皇龍の骨』というものがある。これは本来、皇龍が脱皮したときに古くなつた骨を吐き出したものをとつて来ればよい。しかし、一人の“ある”青年その鱗をいとも簡単に切り裂き、ブレスを受け止めるところかはじき返し、拳果てにはその体内に“直接”入り、“直接”骨を取つてきた。その

青年の名前は

「まあ、俺も一回やったことあるけど。あー、なんであんなめんどくさい取り方したんだろ」

「まあ、達成できたからいいじゃないですか」
「そうだな」

言わずもがな、である。

さあ、気を取り直して

「突撃じゃー！」

「はい！」

かちやかちやかちや・・・がちやん

「開きました！」

「よくやった！よし、じゃあ、早速」

大きく息を吸って。

「おっじゃましまーっすっっ！！」

「お邪魔しますー！」

元気に挨拶！

これで進人は正当化された！（されません。不法侵入です）

「よし！探すぞ！」

「了解ですー！」

搜查開始！

突撃！隣（区画）のお屋敷！（後書き）

ちよこつと修正。

これ終わったら腐ってる貴族シバくマジで() 今回マジギレ注意() 前書き()

久しぶり過ぎる久しぶり

これ終わったら腐ってる貴族シバくマジで（今回マジギレ注意）

Side:ベルム

「よし！探すぞ！」

「了解です！」

うし！

早速探しに

「って、ちょっとまってえええええい！！（小声）」

「?どうかしましたか?（小声）」

小声にしたのはなんとなく。

建前で、ご近所迷惑だから。

・・・この屋敷の近くに家ないけど。

「俺、探査魔法持ってんやん！（やつぱり小声）」

「ええ！？それを早く言ってください！（こっちも小声）」

くっそおう。

これが孔明の罠か。（だから違います）

まんまとはまるどころだったぜ。

だがな・・・その程度で俺を倒せると思うなよ！

・・・俺、誰に向かっていってんだ？

・・・まあ、いつか。

「そついやさ（congry）」

「はい（ボソツ）」

「小声・・・疲れるな」

「いきなり元に戻りましたね」

「んじゃ、今から普通の音量で」

「わかりました」

と、いうことで。

【サーチ・スミス探査魔法発動】

そして広がる俺の感覚。

どこに何があるか。

誰がどんなことをしているのか。

5km限定だけど・・・。

まあ、今はこれでも十分だけどな。つか、十分スゲル。

「ふむふむ。生命反応が7つに・・・死霊反応が1つ？」

「え？死霊反応・・・ですか？」

- 死霊 -

呼んで字の如く、死んで幽霊になった魔物だ。生きていた人間が盗賊にやられてり、魔物に喰われ足りした時、この世に未練、またはそれに属するものを持つていた時に生まれる。この魔物はある程度Levelが高くないと視えないし、触れない。ある程度といったが、上級職業になったら、視れるし触れる。じゃないと上級ダンジョン『死して尚も恨まん』に入った瞬間やられる。だが、職業死神またはその派生職業だと、普通に会話できて、普通に友達になれる。たまに良い依頼持つてるやついるから、損はない。むしろ楽

しいし、得。

しかしなぜだ？

普通死霊というのはダンジョンとかフィールドにいるはず。

・・・ってことは、だ。

今普通じゃないことが起きてるってことだな。

「とりあえずいくぞ」

「はい」

~~~~移動中~~~~

2階に上がり、右奥から2番目の部屋の前に今、俺たちはいる。

「ここか」

「そのようですね」

扉の向こうから声が微かに聞こえるから間違いない。

「じゃ、空けるぞ」

「はい」

だが、礼儀は忘れない。

コンコン

ビクッ

「入ってもいいか？」

『・・・』

無言、か。

じゃ、もう一回。

コンコン

「入ってもいいか？」

「……どうぞ」

お、今度は返事があった。

「入るぞ」

そう言っつて俺とタナトスは部屋に入る。

そこで見たものは

子供たちが死霊の前に手を広げて、こっちに來させないようにして  
いた。

「……失礼ですが、貴方達は何をしにきたのでしょうか？」

一番前にいた少女（子供達の中でたぶん一番上）が話しかけてくる。

ふむ、何をしにきた、か。

ここは正直に答えるべきだな。それ以外に思いつかん。

「俺達は「僕達のお母さんには近づかせない！！お前達もあいつらと一緒に僕達から全部奪いに来たんだろ！！」……」

涙目になりながら、震える声で手を広げていた子供のうちの一人が言う。

これは……。

「……俺達は君達を救いに来た」

『え？』

俺が言った言葉に啞然とする子供達。

「君達の話、聞かせてもらえないか？」

「……」

一番初めに話しかけてきた少女が頷く。

「タナトス」

「はい」

「俺がキレそうになったら、“アレ”頼む」

「……はい、心得ております」

「いつもすまん」

そうタナトスに言って、俺達は子供達の話の聞くべく、近づいた。

〳〵説明中〳〵

子供達の話聞いて俺は

「・・・」ギリッ

今にも爆発寸前だった。

タナトスがいなかったら、完全にアウトだった。

タナトスには今、俺の感情を制御してもらっている。

まあ、一種の精神干渉系の魔法だと思ってもらえたらいい。

子供達の話をもとめると、こうだ。

村で平和に暮らしている。

賊に襲われる。

女子供以外殺される。

賊の馬車に強制的に入れられる。

賊が「これで金貰えるんだ。貴族さまさまだけ」

魔物に襲われる。

盗賊は逃げ、捕まった人が喰われる。

子供達と死霊になった女性逃げることに成功。

魔物による怪我で女性死亡。

どっかのバカが隠蔽工作を行う。(これは予想)

援助金が来ない。

今現在にいたる。

これを泣きながら説明された。

正直怒りで意識が飛びそうだった。

今、子供達は俺が買ってきた食べ物食べて寝ている。

「・・・ところで、えっと」

『あ、私はエルミアと申します』

「じゃあ、エルミアさん」

『はい?』

「もし」

『はい』

「もし貴女が・・・」

『?..?』

「また子供達を触ることができるとしたら・・・どうします?..?」

これ終わったら腐ってる貴族シバくマジで（今回マジギレ注意）（後書き）

変な終わり方・・・かな？

ペルソナにもタナトスがいて俺びっくり。

はい、アンケート！

すでに3作品連載している私ですが、ネタに詰まりました。

と、いうことで新しく連載しようかなと思っています。

- 1、RATMAN
- 2、これゾン
- 3、ハイスクールDXD
- 4、れでいXばと！
- 5、ファイアーエムブレム 烈火の剣
- 6、IS
- 7、オリジナル作品
- 8、その他の作品

お願いだから叩かないでね！

文句も受け付けないぜ！

下準備（前書き）

久しぶり過ぎて・・・  
W  
W

## 下準備

Side:ベルム

「また子供達を触ることができるとしたら・・・どうします?」

「・・・は?」

おいおいおい。

タナトス、何でお前はそっち側にいる?

何その『あれ?この人頭大丈夫?』みたいな視線は。

「おい、タナトス」

「はい」

「俺が誰だか忘れたのか?」

「・・・ハッ!そうですね、そうでした!」

まったく、タナトスときたら。

「規格外や理不尽も裸足で逃げ出すくらい人外な人でした!」

「うん、そうそう・・・ってそれはあまりにもひど過ぎねーか!タナトス!」

「じゃあ、ベルム様は自分が常識人だとも?」

「うっ・・・いや、まあ、確かに常識人ではないと思うけど」

「そうですね」

「だがな、タナトス。もつとほかに言い方があるんじゃない?」

「では、ベルム様に聞きます」

「おう」

「何所の世界に魔王に『もうお願いしますからやめてください。こ

の身体でも何でも差し上げますから、これ以上攻撃しないでください。もう悪いことはしませんので、お願いします』と泣きながら土下座されている人がいますか」

「・・・いないな」

「そうでしょう」

「でもな、タナトス。その言葉知ってるのって確か俺以外には魔王しかいないはずだぞ？」

「・・・」

「おい、あからさまに目エ逸らすな。つか、エルミアさんの視線が痛い！」

エルミアさんがメツチャ白い目で見てくるんだが。

そう、あれは『うわゝ、いくらなんでもそれはないわゝ』という視線。

なんか俺が痛い子みたいだから、やめてくれ。

それとタナトス。

あの説教もどきのときから気になっていたが、なぜお前が魔王と俺のやり取りを知っている？

あの時はこれ以上小言はイヤ！と思って追求しなかったが、今回のではつきりした。

「タナトス。お前、あの現場にいたな？」

「・・・」

「魔王に気づかれずに潜入できたお前も、相当人外だよな」

「うっ・・・それはベルム様への愛がなせる行動です」

「うれしいけど、そうやって言い逃れしようとしてもダメだからな？」

「ベルム様も人のこといえないくせに・・・」

「・・・いつまでたっても埒が明かない！この話はここまでにしようか」

「そうですね！それが良いでしょう！」

・・・タナトスエ・・・。

有利になるとマシンガンの如く責める。

そこから一転、不利になるとダンマリ。

そして不利な状況から抜け出すと、水を得た金魚の如く明るくなる。でも『なんと都合のいいやつなんだ！』とはおもはない。

人というものはソーユーものなんだと、割り切っているから。人間だもの、仕方ない。

・・・なんか真面目っぽい話だったけど、さっきのは軽く流してもらって結構。

俺自身、シリアスとか泣きシーンというのは好きじゃない。

前の方は、俺が確実に鬱になるか、キレるから。

後の方は、一週間ぐらいちゃんと眠れなくなるから。

だから俺の基本モットーは『シリアスなんて何のその！楽しければすべてよし！』だ。

このことは、たぶん俺の身内全員が知っている。

さっきのタナトスとの会話も、タナトスが俺を気遣ってやったと思われる。

その所為か、幾分か気持ちが晴れた。

まったく。いい“仲間”を持ったものだけ。

おっと、話がずれたな。

気持ちが晴れたといっても、怒りが消えるわけではない。

はやいところ、エルミアさんを生き返らせて（・・・）腐った貴族を締め上げないと。

「エルミアさんもう一度聞きます。また子供達を触ることができるとしたら・・・どうします？」

『それは・・・生き返れる・・・というのでしょうか？』

「そうなりますね」

『本当にそんなことができるのでしょうか・・・？』

「俺を信じてくれれば」

まあ、いきなり「生き返れるんですけど、どうします？」「って聞かれたら混乱するわな。俺だって『何言っちゃってんのこいつ？』と思うしな。

『可能であるならば・・・生き返りたい、いえ、生き返らせてください！』

「OK。わかりました」

よし、本人の許可ももらえた。ここから本番だ。

「タナトス。これから錬金術で『器』を造る」

「はい」

「そこで、必要な材料があるんだが・・・いいか？」

「なんでもどうぞ」

「必要なものは・・・」

「・・・ゴクツ」

「“水”・・・これだけだ」

『・・・へ？』

「？聞こえなかったか？“水”だけだぞ？」

「いやいやいや！さすがにそれじゃあ等価交換にならないんじゃないんじゃ・・・？」

「・・・はあ。タナトス、お前さっき自分で言ったこと忘れたのか？」

「へ？・・・そうだった」

そう、俺は規格外や理不尽が裸足で逃げ出す　　って何言わすんじやい！

・・・コホン。

あー、皆も知っていると思うが、錬金術ってのは普通等価交換だ。だが、最上級職業で、尚且つスキルをMAXにしたとき『対価』という特殊能力が発生する。

- 対価 -

これは、その名のとおり、錬金術を使うときに発生する『対価』についてのスキルだ。等価交換の錬金術の『対価』を低くすることはできるが、なくすことはできない。このスキルはそんな『対価』を最低にして、本来の『対価』を支払った場合と同じものを造り出す能力だ。

「と、言うことで、タナトス！頼んだ！」

「はっ！お任せを！」

そう言っただけでタナトスは窓から飛び出していった。

タナトスエ・・・。

## 下準備（後書き）

基本この世界の人はどんなにレベルが上がっても一人につき1職業。スキルも決めた職業のしか極めることができますん。

ちなみにベルムの身内は全員カンスト、スキルMAXです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8807w/>

---

技を極めし者なり

2011年12月31日17時46分発行